

史跡松前氏城跡 福山城跡 館城跡

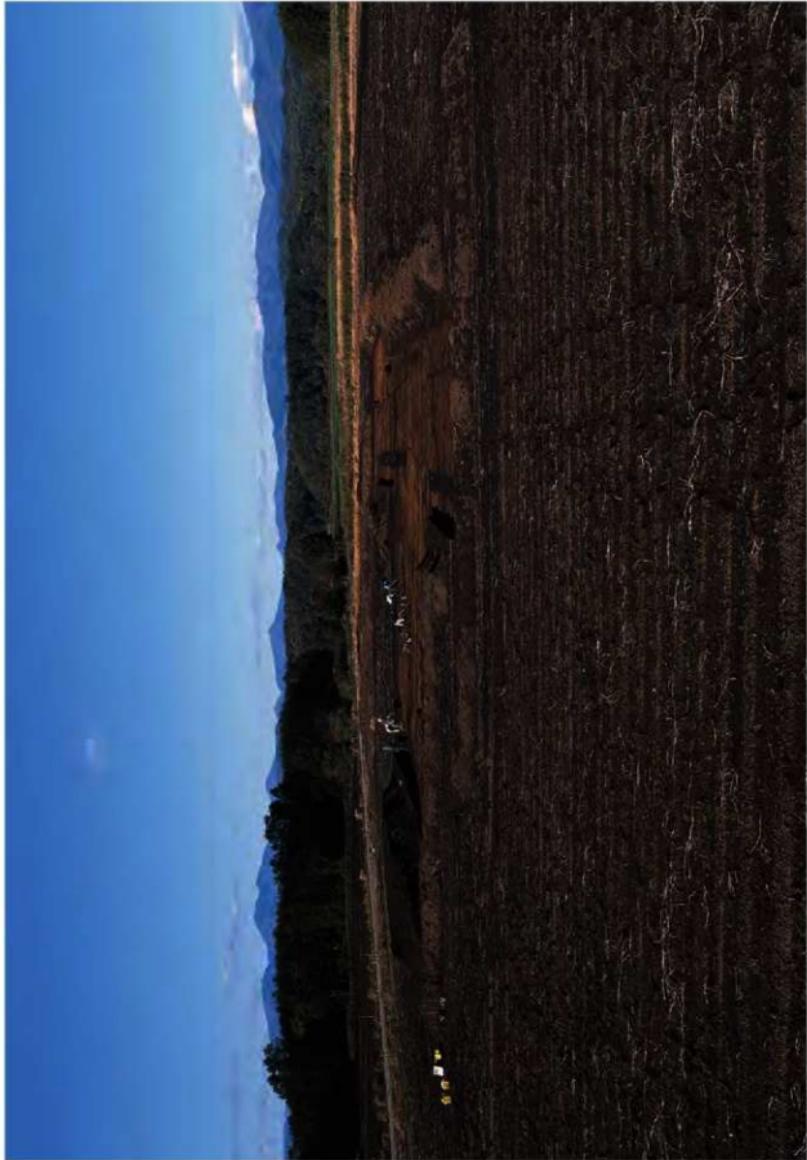
# 館 城 跡 III

－平成17・18年度町内遺跡発掘調査事業に伴う発掘調査報告書－

平成19年3月

北海道厚沢部町教育委員会





平成18年調査区全景　～西辺の堀・柵列の検出～（南から）



## 序 文

北海道南西部に位置する厚沢部町は、人口5千人に満たない小さな町ではあります。川と森に囲まれた自然豊かな町であります。まちの8割以上を森林が占め、ヒノキアスナロやゴヨウマツの北限であり、トドマツの南限でもあります。多様な樹種で構成される森林は、多様な野生生物を育み、厚沢部町独特の豊かな自然景観を創りあげました。私たちの先人も、厚沢部の豊かな森とともに暮らし、その伝統や文化を築き上げてきました。このたび発掘調査を実施いたしました館城跡も、そのような町の貴重な文化財の一つであります。

館城跡は、明治元年、松前藩によって蝦夷地経営の新たな拠点として築かれましたが、築城開始からわずか2ヶ月半という短期間で、旧幕府軍の攻撃を受け落城し、その後、再建されることなく現在に至っております。今では、わずかに土塁や堀、礎石、井戸跡が、当時の面影をとどめるのみとなっています。

現在の館城跡は、「館城跡公園」として町民に親しまれており、毎年5月上旬には「館城跡まつり」が開催され、多くの町民が心待ちにする恒例の行事となっています。また、幕末から維新期にかけての北海道の大きな変革期を象徴する遺跡として、学術的にも高く評価されております。

昭和41年に北海道の指定史跡となり、さらに平成14年に国の史跡に指定されました。厚沢部町では館城跡のより積極的な公開・活用を図っていくために、今後、本格的な保存整備事業を実施する予定です。この保存整備事業に先立ち、厚沢部町では、平成17年度から館城跡の保存管理計画策定事業を実施しているところですが、このたびの発掘調査も、保存管理計画策定に必要な情報を得ることを主な目的として実施したものです。

2カ年にわたる発掘調査では、土塁や堀の構造がより明確になり、また、これまで調査が及んでいなかった館城跡西辺の堀の所在も明らかになるなど、大きな成果を得ることができました。これらの成果が、館城跡の保存管理に活用されるのみならず、調査研究における基礎資料となることを期待いたします。

最後になりますが、本事業の実施に際しまして、文化庁・北海道教育委員会をはじめとする諸機関・各氏から、多くのご指導・ご助言をいただきましたことを深く感謝申し上げます。

平成19年3月

厚沢部町教育委員会  
教育長 朝 倉 勝 春



# 例言

1. 本書は、厚沢部町が国庫補助（埋蔵文化財緊急調査費）を受けて、平成17年度及び18年度に実施した館城跡の埋蔵文化財発掘調査の報告書である。
2. 遺跡の地番は北海道檜山郡厚沢部町字城丘158ほかである。
3. 本書の編集は石井淳平（厚沢部町教育委員会社会教育課主事・学芸員）が担当した。
4. 文責者は、特に記した者以外は石井淳平である。
5. 現場及び遺物の写真撮影は石井淳平が担当した。
6. 陶磁器の鑑定は、石井淳平が行った。
7. 陶磁器の実測・トレース及び造構図面等のトレースは安達優子が行った。
8. 本報告書に掲載した地図は、国土地理院長の承認を得て、同院発行の5万分の1地形図、20万分の1地勢図を複製したものである。（承認番号）平18道複 第244号
9. 火山灰の同定はアースサイエンス株式会社（加藤孝幸）に委託した。
10. 出土資料は厚沢部町教育委員会が保管する。
11. 調査にあたっては、下記の方々及び機関のご協力、ご助言をいただいた。

天方博章、久保泰、前田正憲（松前町教育委員会）、井上勝生（北海道大学文学部教授）、大森忠行、木村秀喜、草間るみ子、後藤元一（札幌市立高等専門学校教授）、財団法人北海道農業開発公社、齊藤克也、齊藤邦典、塚田直哉、松崎水穂（上ノ国町教育委員会）、佐藤永吉（館観光促進会会长）、佐藤智雄、保科智治（市立函館博物館）、新谷浩二、新谷正人、千田嘉博（奈良大学文学部助教授）、田才雅彦（北海道教育厅文化・スポーツ課文化財保護グループ）、只野壽光、中丸寛、中山昭大（財団法人北海道埋蔵文化財センター）、藤沼邦彦（弘前大学人文学部教授）、干場正、堀健治、増川久美子、森靖裕（北斗市教育委員会）、森永光代、山岸富三郎、山岸登、山下信一郎（文化庁記念物課）

## 記号等の説明

1. 実測図等の縮尺は原則として以下の通りとし、全てスケールを付して図中に表示する。  
造構図 40分の1、陶磁器・金属製品 3分の1
2. 実測図中の方位は真北を示す。
3. 土層等の色調、含有物の混在状況（面積比率）については、『新版 標準土色帖』（1996年版）に基づき表記した。
4. 散兵壕については、平成17（2005）年の調査で館城跡とは直接関係しない構造物であることが判明したため、カッコを付けて「散兵壕跡」と表記する。



# 目次

(本文・目次・表・図版)

口絵 平成18年調査区全景～西辺の堀・柵列～（南から）

序文

例言

記号等の説明

## <本文目次>

I 章 調査の概要	1	(1) 第1調査区	19
1. 調査要項	1	(2) 第2調査区	19
2. 調査体制	1	2. 「散兵壕跡」断面確認調査	23
3. 調査に至る経緯	2	(1) 「散兵壕跡」1	23
4. 調査の目的	2	(2) 「散兵壕跡」2	23
(1) 南辺の堀と土塁	3	(3) 「散兵壕跡」3	28
(2) 「散兵壕跡」	3	3. 北辺の堀の調査	28
(3) 北・西辺の堀	3	4. 西辺の堀の調査	28
5. 調査の経過	3	(1) SD1・SA1 調査区南端の調査	33
(1) 平成17年の調査	3	(2) SD1 屈曲部の調査	33
(2) 平成18年の調査	4	(3) SD2 南端の調査	34
6. 調査結果の概要	4	(4) SA2 南端の調査	35
(1) 南辺の堀と土塁	4	(5) SD2(I-12) の調査	37
(2) 「散兵壕跡」	4	(6) SD2(J-12-a) の調査	37
(3) 北辺の堀・柵列確認調査	6	(7) SA2(I-12-b) の調査	37
(4) 西辺の堀・柵列確認調査	6	(8) SD2 西端の断面調査	37
II 章 遺跡の位置と環境	7	(9) SD3 の調査	43
1. 地理的環境	7	(10) 第11、第12調査区の調査	43
(1) 位置と地形	7	5. 遺構出土遺物及び包含層出土遺物及び表採遺物	43
(2) 地質	7	(1) SD2 出土近代遺物	43
(3) 館城跡関連遺跡	7	(2) 包含層出土遺物	46
2. 館城築城に至る歴史的経緯	7	(3) 表面採集陶磁器	46
3. 関川重孝日記にみる館城構築過程	12	V 章 自然科学的分析	51
4. 館城攻防戦の経過	12	1. 火山灰同定	51
III 章 調査の方法	15	VI 章 調査のまとめ	57
1. 発掘調査基線	15	1. 調査成果のまとめ	57
2. 調査の方法	16	(1) 南辺の堀と土塁	57
3. 基本層序	17	(2) 「散兵壕跡」	57
IV 章 遺構と出土遺物	19	(3) 西辺の堀・柵列	57
1. 南辺の堀・土塁の調査	19		

(4) SD2 上層から出土するビール瓶について	57	2. 今後の課題	58
(5) 北辺の堀・柵列について	58	参考文献	59

#### <挿図目次>

I 章	
図1 館城跡遺構・調査区配置図	5
II 章	
図2 厚沢部町の位置と館城跡関連遺跡	8
図3 館城跡の位置と館地区の地形	9
図4 館城跡周辺の地形と史跡指定範囲	10
III 章	
図5 発掘調査グリッド模式図	15
図6 基本層序模式図	17
IV 章	
図7 南辺土堀・堀調査区配置図	20
図8 第1調査区土層断面	21
図9 第2調査区土層断面	22
図10 調査対象「散兵壕跡」の配置	24
図11 「散兵壕跡」1	25
図12 「散兵壕跡」2	26
図13 「散兵壕跡」3	27

#### <表目次>

表1 SD2 出土近代遺物（陶磁器）一覧	48
表2 SD2 出土近代遺物（ビール瓶及びガラス製品）一覧	48
表3 包含層出土遺物（陶磁器）一覧	48
表4 包含層出土遺物（金属製品）一覧	48

#### <写真図版目次>

写真図版1	63
写真1 第1調査区土堀断面(南西から)	
写真2 第1調査区南側土層断面(北西から)	
写真図版2	64
写真3 第2調査区土堀断面(北西から)	
写真4 第2調査区土堀南側基底部及び低温部断面(南西から)	
写真図版3	65
写真5 「散兵壕跡」3調査前(東から)	

図14 館城跡北側調査区配置図	29
図15 館城跡北側流路検出状況	30
図16 西辺の堀の調査区遺構配置図	31
図17 SD1, SA1 調査区南端	34
図18 SD1 屈曲部	35
図19 SD2, SA2 南端	36
図20 SD2 (I-12)	38
図21 SD2 (I-12-a)	39
図22 SA2 (I-12-b)	39
図23 SD2 西端断面	40
図24 SD3	41
図25 第11、第12調査区配置図	42
図26 SD2 出土近代遺物(陶磁器)	44
図27 SD2 出土近代遺物(ビール瓶及びガラス製品)	45
図28 包含層出土遺物	46
図29 表面採集遺物	47

表5 表面採集陶磁器一覧	49
表6 SD2 出土遺物集計	50
表7 包含層出土遺物集計	50
表8 表面採集遺物集計	50

写真6 「散兵壕跡」3断面(南西から)

写真図版4	66
写真7 「散兵壕跡」3窪み部分断面(南西から)	
写真8 第5調査区流路跡検出(東から)	
写真9 SD2, SA2 屈曲部検出(南東から)	
写真図版5	67
写真10 開口部検出(南から)	
写真11 SD1 屈曲部 B-B'断面(西から)	
写真12 SD2 (I-12) 上面検出(北から)	

写真図版 6	68
写真13 SD2 (I-12) 調査風景 (南から)	
写真14 SD2 (I-12) 上層完掘 (南から)	
写真15 SD2 (I-12) 完掘 (北から)	
写真16 SA2 南端完掘 (北西から)	
写真図版 7	69
写真17 SD2 (J-12-a) 検出 (南東から)	
写真18 SD2 (J-12-a) 完掘 (北から)	
写真19 SD2 (J-12-a) A-A' 断面 (南東から)	
写真20 SA2 (I-12-b) A-A' 断面 (西から)	
写真21 SD2 調査区西端断面 (西から)	
写真図版 8	70
写真22 SD3 検出 (西から)	
写真23 SD3 半裁 (西から)	
写真24 SA2 (J-12-c) 柱痕検出 (南東から)	
写真図版 9	71
写真25 SD2 出土近代陶磁器 (左:碗蓋、右:碗)	
写真26 SD2 出土近代陶磁器 (5~8:碗)	
写真27 SD2 出土近代陶磁器 (碗)	
写真28 SD2 出土近代陶磁器 (碗)	
写真29 SD2 出土近代陶磁器 (碗)	
写真30 SD2 出土近代陶磁器 (すり鉢)	
写真図版10	72
写真31 SD2 出土近代陶磁器 (皿)	
写真32 「フジビール」	
写真33 「日本麦酒鉄瓶」	
写真34 「日英醸造」	
写真35 SD2 出土ビール瓶 (11~13:「大日本 麦酒」、14:「フジビール」、15:「日本 麦酒鉄瓶」)	
写真図版11	73
写真36 SD2 出土ガラス製品 (17:ガラス瓶、 18:ランプ油壺)	
写真37 油壺底面 (「大正二年製」浮彫り)	
写真38 包含層出土陶磁器 (19、20:土瓶蓋、21: 銅製品)	
写真39 表面採集陶磁器 (22~29:碗、30~34: 碗蓋、35:皿、36、37:段重、38:油 注蓋、39:火入れ?、40:土瓶、41: 鉢、43:行灯皿?)	



# I 章 調査の概要

## 1. 調査要項

### <平成17年度>

事業名：町内遺跡発掘調査等事業

調査主体：厚沢部町教育委員会

調査地：北海道檜山郡厚沢部町字城丘179-2、182-2、366

調査面積：386m<sup>2</sup>

調査期間：現地調査：平成17年11月21日～平成17年12月16日

整理作業：平成17年12月19日～平成18年3月30日

### <平成18年度>

事業名：松前氏城跡福山城跡館城跡発掘調査等事業

調査主体：厚沢部町教育委員会

調査地：北海道檜山郡厚沢部町字城丘179-1、182-1、183-1、183-2、184-1、185-1、186-1、971

調査面積：1798.18m<sup>2</sup>

調査期間：現地調査：平成18年10月2日～平成18年11月10日

整理作業：平成18年11月13日～平成19年3月30日

## 2. 調査体制

### 平成17年度

厚沢部町教育委員会

教育長 朝倉勝春

社会教育課長 関川 潔

社会教育係長 高野政人

社会教育係 三戸康彰

社会教育係 石井淳平（発掘担当者）

社会教育係 浜谷美穂子

郷土資料館整理作業員 石若 弦

発掘調査作業員

天野信一 安達優子 洪泰榮 増田孝治 山岸富三郎 松島美保子 藤八伸太郎 工藤直三 藤岡俊吾  
早瀬仁朗 鈴木ちず子 由利真奈美 田木敏子 野島静夫 菊池美晴

### 平成18年度

厚沢部町教育委員会

教育長 朝倉勝春

社会教育課長 関川 潔

社会教育係長 高野政人

社会教育係 紺野和美

社会教育係 三戸康彰

社会教育係 石井淳平（発掘担当者）

発掘調査作業員

天野信一 安達優子 橋端竜志 布久保聖弥 野村昭英 田中由香

整理作業員

安達優子

### 3. 調査にいたる経緯

館城跡は、明治元年（1868）9月に松前藩によって築城が開始され、同年11月、榎本武揚率いる旧幕府軍の攻撃を受け落城した。その後、大規模な開発行為の影響を受けず現在に至る。落城後の館城跡の姿は、明治19（1886）年に館城跡を訪れた北海道厅理事官青江秀や、明治21（1888）年に館地区に入植した二木小児郎によって確認され、門柱の焼け跡や井戸跡の存在が記録されている（二木1937、『北海道巡回紀行巻五』北海道立図書館蔵）。

館城跡周辺は、明治30年代に松村農場の所有となり、その後、田口伊右衛門、前川吉三郎と所有者が変わったが、いずれの所有者も史跡の保存に关心を示し、標示板の設置や植樹など、史跡の保存と周知に努めたという（『櫻島－厚沢部町の歩みー』p379）。戦後の農地解放で約3分の2が民有地となり、残る3分の1の土地所有者となった前川は、昭和33（1958）年に所有地を町に寄付した。

昭和30年代に入り、史跡保存への关心が高まり、昭和37（1962）年に館城跡保存会が発足した。保存会では挽馬競技会を開催し、その余剰金を案内板の製作や桜樹の植樹費用に充てるなど、史跡の保存と周知に務めた（『櫻島－厚沢部町の歩みー』p384）。

昭和39（1964）年10月には高倉新一郎、大場利夫らが館城跡の発掘調査を実施し、陶磁器、鉄釘などが採集された（大場1969）。また、この時期に地形測量調査も実施されたようである。これらの調査結果に基づき、昭和41年7月7日付北海道教育委員会広報第2945号で、「館城跡」として道指定の告示（北海道教育委員会告示第65号）がなされた。

昭和63（1988）年頃から、町では国の史跡指定へ向けての取り組みを進め、同年8月には文化庁調査官の現地観察が行われた。昭和63（1988）年9月29日～10月13日、平成元（1989）年10月2日～11月4日、平成2（1990）年10月2日～16日の3カ年にかけて、遺構確認調査が厚沢部町教育委員会により行われ、溝や柵、礎石などを検出した。これらの成果を受け、平成13（2001）年6月25日、史跡松前氏城跡福山城跡の追加指定の申請をし、平成14（2002）年9月20日付官報号外第208号で、「史跡 松前氏城跡 福山城跡 館城跡」として国指定の告示（文部科学省告示第183号）がなされた。

平成15（2003）年7月に学芸員を配置し、平成17（2005）年から2カ年で保存管理計画策定事業を行っている。平成17（2005）年6月22日に、文化庁記念物課主任文化財調査官坂井秀弥氏、北海道教育庁文化課主査長沼孝氏が来町し、館城跡を視察した。視察の中で、保存管理計画策定のために、館城跡の外郭線を構成する堀・土塁の範囲や構造、「散兵壕跡」とされる遺構の内容を確認する必要があるとの指摘を受けた。

坂井氏、長沼氏の指摘を受け、2カ年の計画で、保存管理計画策定に必要な堀・土塁など館城跡の外郭線を構成する遺構及び、「散兵壕跡」の内容確認調査を実施することとした。

### 4. 調査の目的

館城跡の本質的価値を構成する遺構のうち、特に史跡の保存管理に必要な、南辺の堀と土塁、「散兵壕跡」、北・西辺の堀について調査を実施した。

### (1) 南辺の堀と土塁

南辺の堀と土塁は、館城跡で唯一残存する堀と土塁である。周辺は昭和30年代に挽馬競馬場造営に伴う造成工事を受けしており、旧地形が判然としなくなっているほか、堀・土塁にも造成工事の影響が推定される。昭和63年の遺構・範囲確認調査の際にも、調査対象となったが、遺構に対する土地造成の影響について、詳しくは言及されていない。堀・土塁の構造及び周辺の包含層に対する造成工事の影響を確認するため、調査を実施した。

### (2) 「散兵壕跡」

史跡南端に位置する小丘陵、通称「丸山」では、昭和43年に「散兵壕跡」とされる遺構群が発見され、これらを取り込む形で国の指定が行われている。当該遺構の形成年代や性格を判断する材料を得るため、典型的と思われる3基を選定し、調査を実施した。

### (3) 北・西辺の堀

これまでの調査で検出されていない、北西部分の堀を検出することを目的として調査を実施した。

## 5. 調査の経過

### (1) 平成17年の調査

#### <調査準備等>

10月 6日 平成17年10月 6日付厚教社現状変更許可申請書提出

10月20日 発掘調査作業員を募集

11月 4日 安藤測量設計事務所による館城跡周辺基線杭設置作業開始

11月 7日 発掘調査作業員雇用契約の締結

11月17日 調査担当者による発掘調査用グリッド杭設置作業開始

11月18日 発掘調査機材の現地搬入

#### <現地調査>

11月21日 発掘調査開始。南辺土塁西部（第1調査区）の調査開始

11月22日 第1調査区の調査終了。南辺土塁東部（第2調査区）の調査開始

11月24日 湧水のため第2調査区の調査を一時中断。「散兵壕跡」の調査開始

11月28日 第2調査区の調査を再開。湧水は相変わらず続いているが、地山を検出できたため、掘削を終了する。「散兵壕跡」の調査終了。北辺の堀・柵列検出のため第3調査区を設定。

12月 1日 第3調査区の調査終了。堀・柵列を検出できなかつたため、西側30mのM-8グリッドに第4調査区を設定する。

12月 5日 第4調査区を北に20m延長する。

12月 6日 N-9グリッドから西へ東西方向に第5調査区を設定する。M-10グリッドから南北方向に第6調査区を設定する。

12月 7日 第5調査区で沢状地形と考えられる黒色土の落ち込みを検出。第5調査区を西へ拡張し、13ランまで延長する。

12月12日 第1、第2調査区、「散兵壕跡」調査区埋め戻し作業

12月13日 調査範囲の杭抜き。テント、発掘機材撤収

12月16日 調査区配置図面等作成。現地調査終了

#### <整理作業>

12月19日 図面整理、素図作成、報告書原稿執筆

～3月30日

(2) 平成18年の調査

<調査準備等>

6月10日 第1回館城跡保存管理計画策定委員会開催。平成18年度発掘調査計画についての指導。

～11日

8月24日 平成18年8月24日付厚教社、現状変更許可申請書提出

9月28日 平成18年9月28日付18委令附第4の1150号にて現状変更許可書

10月2日 発掘調査作業員雇用契約締結。調査担当者による発掘調査用グリッド杭設置作業開始。

<現地調査>

10月10日 発掘調査作業開始。重機による表土掘削開始。堀の輪郭をほぼ検出。

10月11日 櫛列検出のため、第7～第10調査区を拡張。調査区の壁面清掃及び遺構検出作業。

10月12日 第11調査区、第12調査区の表土掘削。第7～第10調査区の遺構検出作業。調査区及び遺構配置簡易測量。

10月16日 開口部調査区拡張。堀・櫛列検出状況写真撮影

10月19日 遺構調査開始

10月22日 第2回館城跡保存管理計画策定委員会開催

～23日

10月31日 撤収準備

11月2日 現地調査終了。発掘機材等撤収

11月9日 遺物水洗作業開始

11月10日 調査区埋戻し

<整理作業等>

11月15日 整理作業開始。出土遺物注記

11月27日 素図作成作業開始

12月6日 遺物接合・復元作業等

～3月30日

## 6. 調査結果の概要（図1）

(1) 南辺の堀と土塁

断面確認調査の結果、堀・土塁の北側（城郭内部）では、最大1mの深度で掘削を受けていることが明らかになった。それ以外では、堀・土塁の周辺の包含層は良好に保存されている。2カ所設定した調査区のうち、東側の調査区では西側に比べて、堀が幅広につくられていることを確認した。また、土塁についても、西側と東側では異なる工法で築造されていることを確認した。

(2) 「散兵壕跡」

「散兵壕跡」と称される遺構群は丘陵斜面に立地し、いずれも谷側に土塁状の高まりがあり、山側に楕円形の窪みがある。断面観察の結果、土塁状の高まりでは、構築面が確認できず、基本層序と逆順の堆積構造であること、窪みでは、掘削を確認できないことが判明した。以上の結果から「散兵壕跡」は人為的な構築物ではなく、風倒木痕の可能性が高いと判断した。

(3) 北辺の堀・櫛列確認調査

北辺の堀・櫛列の検出を目的に調査を実施した1989年の結果を参考に、堀が存在すると推測される位置

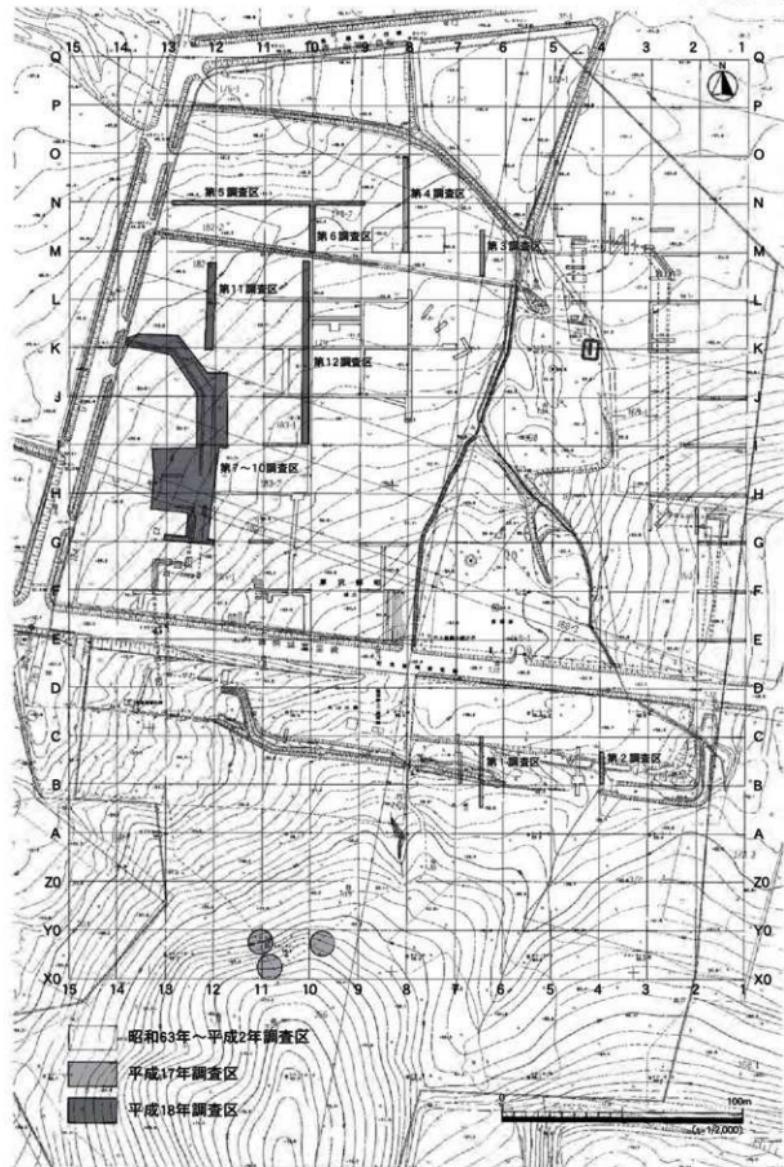


図1 館城跡遺構・調査区配置図

に、幅2m、長さ20~40mの調査区を、東側から30~40m間隔で3本設定した。その結果、いずれの調査区でも堀を確認することができなかった。

#### （4）西辺の堀・柵列確認調査

1990年の発掘調査によって確認された堀・柵列を再検出し、その地点から北側へ調査区を拡張し、堀・柵列の確認を行った。当初、西辺の堀・柵列の延長上で、北辺の堀・柵列を確認できるであろうと予想していたが、堀・柵列は西へ屈曲し、調査範囲外へと延びたことから、北辺の堀の所在を明らかにすることはできなかった。

また、堀・柵列が約14mの間隙をもって途切れる開口部を検出した。館城跡の「正門」を構成すると考えられるが、門などの痕跡を検出することはできなかった。

## II章 遺跡の位置と環境

### 1. 地理的環境

#### (1) 位置と地形 (図2~4)

厚沢部町は、北海道南西部渡島半島に所在し、北緯41°47'~42°03'、東経140°09'~140°28'に位置する。江差町、上ノ国町、木古内町、北斗市、森町、八雲町、乙部町と界を接し、町域は厚沢部川とその支流である安野呂川、鶴川の三河川の流域にまたがり、総面積は460.42km<sup>2</sup>、東西約29km、南北約27kmの広がりをもつ。

館城の所在する館地区（厚沢部町字新栄、字当路、字中館、館町、南館町、字城丘、字富里の総称で旧大字館村にほぼ一致する地域）は、東側を日本海と太平洋との分水嶺を形成する山塊、南側及び西側を梯子山、幌内岳、五郎助岳などの標高500m級の山々、北側を字中館のなだらかな丘陵地帯に囲まれた盆地である（図3）。盆地の規模は、古佐内川と厚沢部川の合流点付近の地峡から佐助沢、泉沢の合流地点までの東西約9km、南館の市街地から館町市街地までは南北約1.5kmである。

館城跡は、厚沢部川左岸の盆地の南西、厚沢部川とその支流である糠野川の合流地点から東へ約1kmに位置する。南方から延びる舌状台地上に立地し、遺跡周辺は南から北に向かって緩やかに傾斜する。遺跡の標高は約50mで、糠野川に面した平坦面からの比高差は約20mである。遺跡の北、西、東は開け、南は比高差約30mの小丘陵（通称「丸山」）となっている。

#### (2) 地質

館地区的地質は、新第三紀に形成された厚沢部層、館層、鶴層などのシルト岩や砂岩によって形成され、さらに、これらの基盤として、古生代の松前層群と中生代の上磯層群がある。新第三紀中新世前期には、グリーン・タフ変動に伴う火山活動により福山層の堆積があり、中新世中期の大規模な海進により、檜山層群が堆積する。厚沢部層の時期に現在の向斜軸（館城跡、鶴町市街地の東側をとおり、南北方向に延びるライン）より東側の沈降に伴って、多量の堆積物が形成された。

館盆地の中央部分では軟質の館層が広く分布することから、河川の浸食の影響を強く受け、広く開析された低平地が形成されている。字新栄から館町市街地にかけては、1段の河成段丘が形成され、現河床から約45~55mの比高差をもつ。段丘堆積物は、松前層群からの供給によるチャート・砂岩・粘板岩などの礫で構成される。館町、字当路、字新栄では沖積平地が発達し、厚沢部川の氾濫原を構成する（参考文献：北海道開発庁1970、工業技術院地質調査所1975）。

#### (3) 館城跡関連遺跡 (図2)

館城跡及び箱館戦争関連遺跡として、①官軍の沢、②稻倉石古戦場、③鶴村古戦場、④丸山古戦場、⑤ロクロ場、⑥開墾役所跡、⑦米揚げなどがある。①は、明治2（1869）年に新政府側の部隊の進撃路となった沢、②~③は館城攻防戦にともなう古戦場、⑤~⑥は安政年間に設置されたとされる開墾役所跡とそこへ荷揚げした伝えられる地域である。⑦は、館城跡に物資を荷揚げしたと伝えられる地域である。

### 2. 館城築城に至る歴史的経緯

#### <松前崇広の藩主就任>

嘉永2（1849）年、松前藩12代藩主昌広の引退に伴い、昌広の叔父で10代藩主章弘の六男為吉（崇広）が13代藩主に指名される。昌広引退時、松前家において家督相続可能な者は、為吉と昌広の嫡子徳広の二人のみで、徳広が幼少のため（嘉永2年時点で5歳）、為吉の後継藩主には徳広が就任することを条件に、為吉

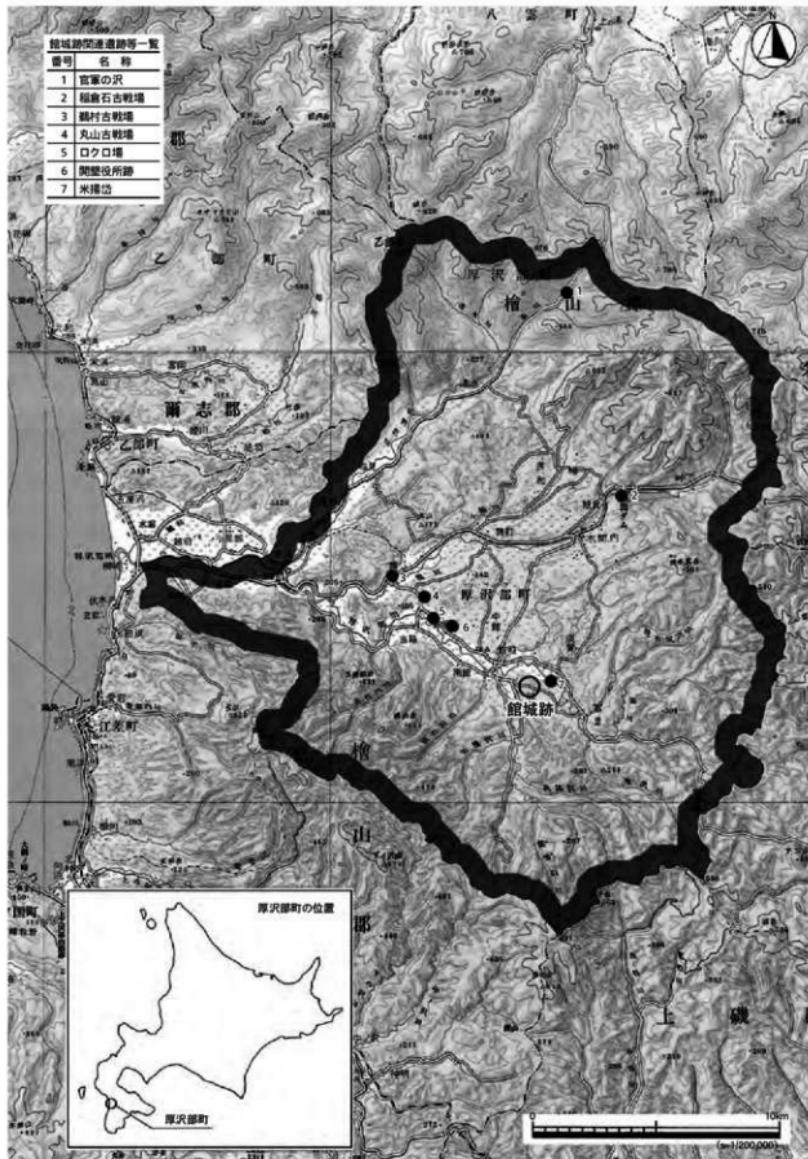


図2 厚沢部町の位置と館城跡関連遺跡(国土地理院発行20万分の1地勢図「室蘭」、「函館」を合成して加筆)



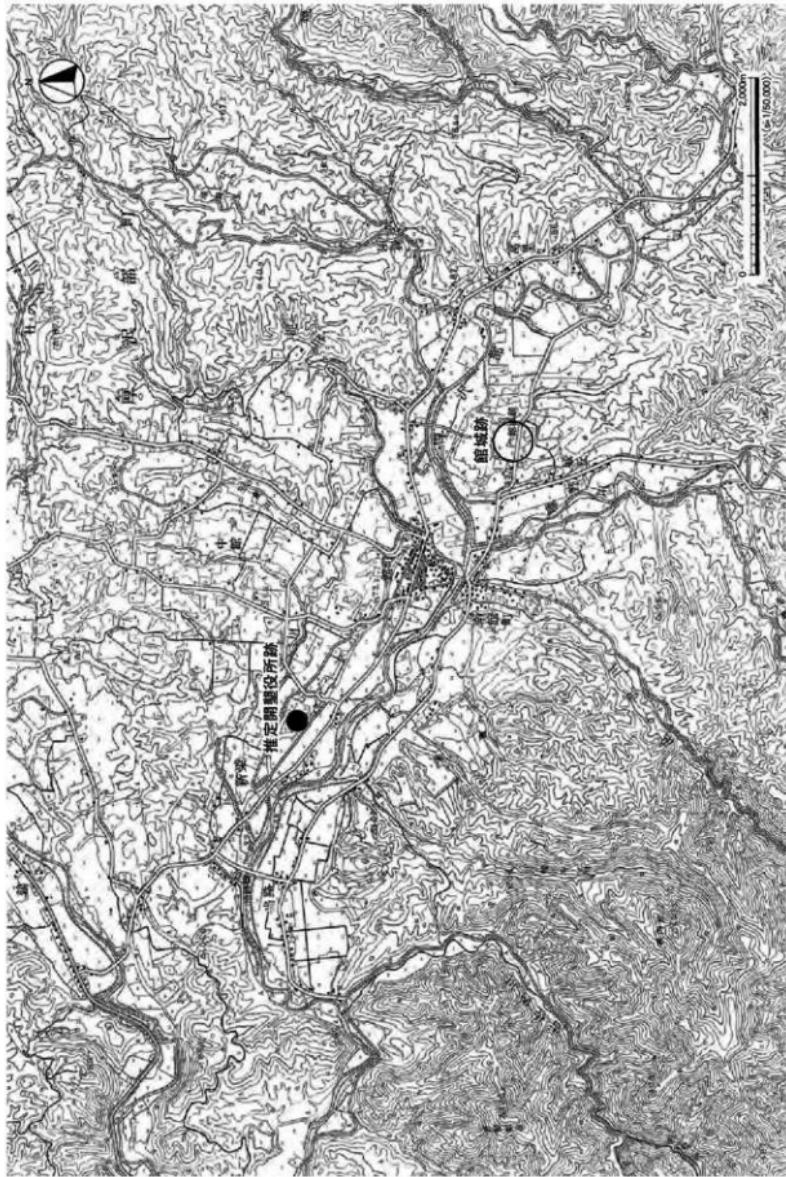


図3 館城跡の位置と館地区の地形（国土地理院発行5万分の1地形図「館」に加筆）

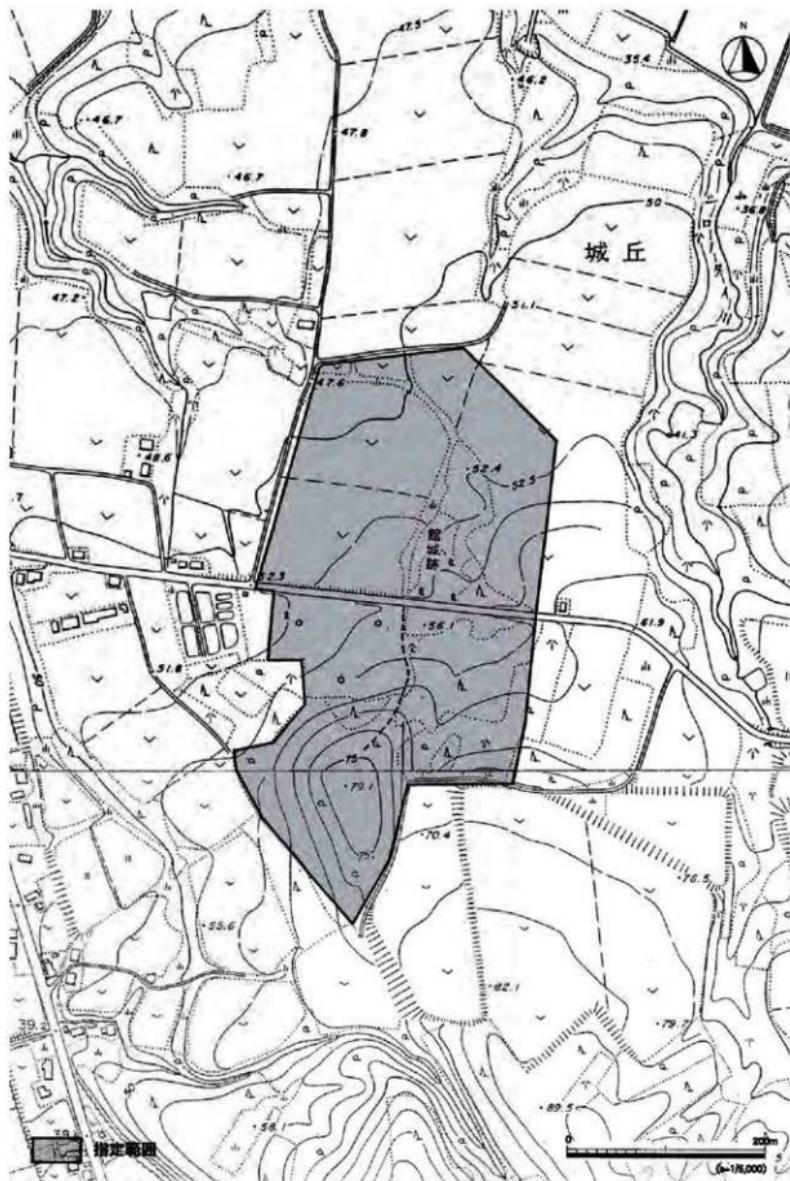


図4 館城跡周辺の地形と史跡指定範囲

が藩主に就任し、崇広を名乗った（『北門史綱』卷一 松前町史編集室1974）。

当初は中継ぎ的な意味合いを持った崇広の藩主就任であったが、文久3（1863）年の寺社奉行就任を皮切りに、元治元（1864）年老中格海陸軍總奉行就任、慶応元（1865）年海陸軍總裁就任など、幕閣で異例の昇進を遂げた（『北門史綱』卷四～六 永田1991）。このため、崇広周辺には家老松前勘解由をはじめとする親崇広派の藩士集団が形成され、藩政の中核を担うこととなった（『松前町史』通説編第一巻下 p1108）。

#### ＜松前崇広の死去と徳広の藩主就任＞

崇広は、兵庫開港問題について老中阿部豊後守とともに將軍後繼職一橋慶喜と対立し、慶応元（1865）年、朝廷の命により官位剥奪、国元謹慎の処分を受ける。その後、松前にて謹慎中の慶応2年4月に病死する（『北門史綱』卷六 永田1991）。

崇広の死後、12代藩主の嫡子徳広が藩主に就任するものの、病弱な徳広は政務を執ることができず、家老松前勘解由、蠣崎将監らは藩主徳広を引退させ、先代崇広の嫡子敦千代（隆広）を次期藩主にしようと画策したという（『江差町史』第六巻通説二 p 2）。このため、慶応2（1866）年11月、後に正議隊を結成することとなる反勘解由派の家臣団が、『建言書』（『慶応二丙寅十一月旧寄合中より建言書』 江差町史編集室1979）を藩主徳広に上申した。これにより松前勘解由は家老職を辞すこととなるが、反勘解由派の蠣崎民部らは脱藩の罪に問われ、また、藩政は依然として勘解由派が取りしきっていた。

#### ＜正議隊の武力行使＞

明治元（1868）年7月28日、反勘解由派の藩士ら38名が登城し、蠣崎勇喜衛以下43名の連署による『正議隊建白書』（江差町史編集室1979）を藩主徳広に提出した。『建白書』を受けた徳広は、勘解由ほか4名の重臣の登城を差し止めたが、勘解由らはこれに従わず、町役所に諸士を呼び集め密議を行なったという（『奉命日誌』江差町史編集室1979）。こうした勘解由らの行動に「憤懣堪へ」ない正議隊藩士らは、8月1日、勘解由派に対する武力行使を実行した（『奉命日誌』）。この武力行使に先立つ7月29日、江差奉行尾見雄三が、江差在郷藩士らを率いて江差から出動し、8月1日に福山城下へ到着した（『慶応四年四月より行事見聞録』江差町史編集室1983）。尾見は、かねてから江差在郷の藩士や江差商人団を反勘解由派に引き込んでいたとされ、江差商人団が反勘解由派の資金源となつたとの見解もある（『江差町史』第六巻通説二 p 5）。

8月1日から開始された正議隊による勘解由派の肅清は、9月24日の山下雄城の処刑をもって一段落し、勘解由派の主要人物のほとんどを殺害する結果となった。

#### ＜館城の築城＞

勘解由派に対する大量肅清により藩政の実権を手にした正議隊首脳部は、館村への築城を計画した。『奉命日誌』9月11日の項に「館村へ築城願書老通ハ下國東七郎ヲ以テ 太政官へ進達 老通ハ雄三裁判所へ進達」とあり、館城築城に係る願書が、下國東七郎によって太政官及び箱館裁判所へ提出された。この築城願書に対する新政府築城許可書は11月11日付で交付されている（『江差町史』卷六通説二 p36）。『報功心血』（函館市中央図書館蔵）では、「館村移城を決すると雖ども、未だ朝廷の裁可を得ざるの間は、公然たる經營を唱ふる能はず。故に勘農の名に藉りて、これが準備に従はしむるの内儀となり」とあり、鈴木文五郎、牧村可也、今井愚一、鈴木次郎蔵、三浦巽、石塚和平が「準備委員」として「専任」された。『奉命日誌』8月28日の項には、氏家丹宮、鈴木又五郎、牧村可也、今井愚一、鈴木次郎蔵、石塚知平、三浦巽らが勘農方として江差表へ出張を命じられ、関川平四郎が御先手組へ取り立てられ、勘定奉行・作事方を命じられたことが記されている。すなわち、館城築城について、8月末の段階では新政府の許可が得られていないため、勘農の名目によって現地作業が開始されたと考えられる。

### 3. 関川重孝日記にみる館城構築過程

館城築城の勘定奉行兼作事方を任命された江差の豪商、関川重孝(平四郎)が残した日記によって、その執務内容から館城築城工事の様子を知ることが出来る(江差町史編集室1981)。

9月2日に館村の鈴木文五郎に宛てて遠眼鏡を送ったことが記されており、この時期に、担当者が現地入りしていたことを知ることができる。9月14日には、大工四十人・木挽十人が館へ向けて出立している。9月21日には、福山から大工棟梁孝次郎はじめ、下職28名が江差へ到着し、館へ向けて出立している。

また、9月12日頃から土木作業が開始されており、9月23日現在の延べ人工数は、1,525人工に達している。9月28日現在の館城普請に係る人員は、大工棟梁浜田仁兵衛、幸治郎以下、大工小頭五人、木挽2人、平大工92人、下木挽21人、土方小頭7人、土方243人、人足183人となっている。

10月14日には、建具師3人が木材と供に館へ向かっており、また、10月16日には、間似合、唐紙、玉子などの襖材料が館へ送られており、館城普請は、内装作業へと移りつつあったことがわかる。

10月24日には、棟上げの儀式が行われたことが記されており、城内の重要な建物の棟上げが行われたことを知ることができる。10月26日には、七飯峠下での旧幕府軍と新政府軍との戦闘を受けて、三上超順や今井興之丞が、手勢を引き連れて木間にまで出張している。館城普請の最終的な結果については触れられていないが、関川重孝の築城日記もこの10月26日をもって終わっており、この前後に、館城の普請もほぼ終了していたと考えられる。

### 4. 館城攻防戦の経過

#### <松岡隊の五稜郭出陣>

明治元(1868)年11月10日、館城攻略のため、「五稜郭よりは松岡四郎次郎兵二百余人を率い二股口間道を進」んだ(『麦叢録』菊池1998)。松岡隊は、「其日、大野へ宿陣」し、「敵ノ襲来ヲ拒ケガ為ニ二日ヨリ屯シ置キタル兵二小隊」と合流し、翌11日、「山道ノ臉組ヲ越へ、行程七里元籠小屋ト云廻ニ」に宿陣した(『蝦夷録』須藤1996)。松岡隊の出陣前日、偵察を命じられた石井梅太郎が「陣屋前(木間に内の陣屋と思われる—引用者註)」で松前藩兵に見咎められ、斬首されている(『説夢録』須藤1996)。

#### <稻倉石の戦い>

翌12日、旧幕府軍は稻倉石の地峠に設けられた松前藩軍陣地への攻撃を開始する。稻倉石の門番は、「丈余の丸太を以て隙間なく柵を構へ」たもので、「野戦砲並製のポート二門に十三樽ハント二口」を装備していた(『北洲新話』須藤1996)。旧幕府軍は、「一大隊ヲ四ツ二分カチ、一小隊ヲ正面ヨリ進メ、各一小隊ヅツ左右ノ臉組ヨリ進マシメ、関ノ左右ヨリ是ヲ撃」ったところ、松前藩軍は、「本道ノミ嚴重ニ堅メタル廻、左右ノ臉組ヨリ一度ニ攻掛ラレ敗走」し、「キマナイ」ト云廻ノ陣屋ヲモ焼捨テ引退」いた(『蝦夷録』)。この日、旧幕府軍は、松前藩の残した木間に内の陣屋に宿陣したとみられる(『説夢録』)。

#### <鶴村の戦い>

翌13日、旧幕府軍は、「兵を両道に分かち鶴村に」到達した(『麦叢録』)。

14日、旧幕府軍は隊を2隊に分け、「二小隊をして巡邏の為、館村へ出」(『麦叢録』)したところ、松前藩軍は、「我兵の城辺に巡邏せしを全軍進撃城に迫ると察」し、「我が本營に討て掛」った(『説夢録』)。旧幕府軍の2小隊が「速かに出て之と応戦」し、「此手の隊長を打斃」し、松前藩軍を撃退した(『説夢録』)。

館村へ向かった2小隊も「敵兵と会し」戦闘状態となった(『麦叢録』)。旧幕府軍が「五六人」の兵を「傍なる山に入喇叭を吹立て横合より打入ん」としたため、松前藩軍は「潰走し、館の新城に退」いた(『麦叢録』)。旧幕府軍はこれを追撃せず鶴村へ帰陣した(『蝦夷録』)。

## &lt;館城の戦い&gt;

15日早朝、旧幕府軍は「三小隊をして両道に分ち雪を冒し進で新城に迫」った（『麦叢録』）。館城に立てこもる松前藩軍は、「城中より大小砲を連発し防戦もつとも勤」めた（『蝦夷之夢』 菊池1998）。旧幕府軍は「路の嶮に依りて砲を持ち来ら」なかつたため、「門扉を破るを得」なかつた（『蝦夷之夢』）。戦闘が膠着状態におちいった頃、旧幕府軍側の「差団役伊奈誠一、越智一朔」の2名が「衆に抜きて奮進、水門に躍り入り、潜りて城中に乗り入」り、「これに力を得て門を破」つたため、「衆兵衝き入り短兵接戦」となつた（『蝦夷之夢』）。

館城内での白兵戦の最中、松前藩軍事方三上超順は、「乱丸の中をも恐れず左の手に俎板を持、丸を防ぎ右の手に刀を閃かし兵壱兩人を切殲」し、さらに「惣導役伊奈誠一郎（越智と俱に門を破りしものー原註）、「横田豊三郎（差団役頭取ー原註）」と戦いこれを負傷させた（『麦叢録』）。「此時堀覺之助（軍監ー原註）、黒沢正介（差団役ー原註）遙に之を見て飛が如く馳せ付、超順を切殲」した（『麦叢録』）。

形勢不利となつた松前藩軍は、「潰散柵を超へ道を争ふて乱走」した（『北洲新話』）。館城を占領した旧幕府軍は、「兵少く守に便ならず」と判断し、「火を縱ちて鶴村に」帰陣した（『北洲新話』）。



# III章 調査の方法

## 1. 発掘調査基線（図5）

1988年～1990年の発掘調査グリッドを踏襲することとした。このグリッドは、平成14年の測量法改正以前の旧日本測地系（平面直角座標系XII系）に沿って設定された20m方眼を基本とし、南から北へ向かってA, B, C, …、東から西へ向かって0, 1, 2, …としている。なお、Aラインより南側については記号が付されていなかったが、今回より北から南へ向かって、Z0, Y0, X0, …とすることとした。0ラインより東は史跡指定範囲外となり、今回の調査では名称を付していない。この方眼は、直交するラインの交点から北西の20m平方を、その交点のアルファベットと数字の組み合わせで呼称するもので（例：F-8）、必要に応じて、10m方眼の小グリッドに分割した。小グリッドは、グリッドの基点となる交点（杭の打設位置）から反時計回りにa, b, c, dとした（例：F-8-d）。この方眼の日本測地系（平面直角座標系XII系）による平面直角座標は、

F-13 : X=-235800 Y=7900

A-13 : X=-235900 Y=7900である。

測量法の改正に伴い、それまでの平面直角座標系（昭和43年建設省告示3059号）は廃止され、新たに世界測地系に基づく平面直角座標系（平成14年国土交通省告示第9号）である「日本測地系2000」が平成14年4月1日から施行されたため、基線杭設置の成果は世界測地系による平面直角座標として表示する。

世界測地系（平面直角座標系XII系）による平面直角座標は、

F-13 : X=-235543.580 Y=7606.679

A-13 : X=-235643.579 Y=7606.679である。

基線杭設置業務は、（有）安藤測量設計事務所に委託し、指定地内町有地及び指定地周辺の町道におよそ50m間隔で設置した。調査区域へのグリッド杭の打設は、この基線杭を元に調査担当者が適宜行った。

## 2. 調査の方法

<平成17年度>

### （1）掘削

全て手作業で行い、埋戻し作業の一部を除いて重機は使用していない。表土及び耕作土（基本層序I層）の掘削にはスコップを用い、II層以下の土層や土壌、「散兵壕跡」の掘削には移植ゴテを用いた。

### （2）現地測量

現地での実測図面は縮尺20分の1を基本とし、規模の大きな造構や地形図等は適宜40分の1や100分の1で作図した。

造構の平面測量は、グリッド杭を基準として設定した簡易な水糸造方により、手作業で行った。水準測量は、水準点が設置された基線杭から、調査区付近のグリッド杭の標高を算出し、この標高値を利用して計測した。使用機材はオートレベルと5mm目盛りのアルミスタッフで、グリッド杭と対象の比高を直接観測して行った。

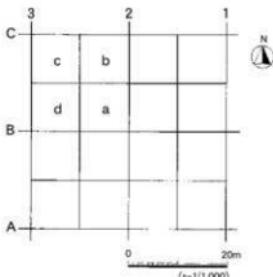


図5 グリッドの呼称方法

遺物の取り上げは原則として出土グリッド及び層位、日付を記録した。グリッドは10m平方の小グリッド単位での表示を基本とした。

### (3) 写真記録

写真記録は調査前、調査状況、遺構等検出状況、土層断面、調査終了状況等を撮影した。使用フィルムは135サイズのスライドフィルム（富士フィルムプロビア100F（RDPⅢ））で、撮影機材はNikon F3 + Nikkor AiAF Zoom 35-70 F2.8Dである。

<平成18年度>

#### (1) 挖削

表土（耕作土）の掘削にバックホウ（0.35m<sup>3</sup>級）を使用した。調査対象区には、原則として包含層が残存せず、表土除去後の残土を人力（ジョレン・スコップ）で除去し、遺構確認を行った。遺構の掘削には、移植ゴテを使用した。

#### (2) 現地測量

現地での実測図面は縮尺20分の1を基本とし、規模の大きな遺構や地形図等は適宜40分の1や100分の1、200分の1で作図した。

遺構の平面測量は、グリッド杭を基準として設定した簡易な水糸造方により、手作業で行った。水準測量は、水準点が設置された基線杭から、調査区付近のグリッド杭の標高を算出し、この標高値を利用して計測した。使用機材はオートレベルと5mm目盛りのアルミスタッフで、グリッド杭と対象の比高を直接観測して行った。

遺物の取り上げは原則として出土グリッド及び層位、日付を記録した。グリッドは10m平方の小グリッド単位での表示を基本とした。表採遺物は、20m平方の大グリッドによる表示とした。

### (3) 写真記録

写真記録は調査前、調査状況、遺構等検出状況、土層断面、調査終了状況等を撮影した。撮影機材は、Mamiya RB67 PROFESSIONAL SD(中判フィルムカメラ) + Mamiya KL65mmF4L 及び Nikon D70S(デジタル一眼レフカメラ) + Nikkor AiAF20mmF2.8D + Nikkor AiAF50mmF1.4Dで、中判カメラでは、120サイズのスライドフィルム（富士フィルムプロビア100F（RDPⅢ120））を使用した。デジタルカメラは、2240×1488ピクセルのJPEG形式で撮影・保存した。

遺物撮影も同様のシステムを使用し、中判カメラではスライドフィルム（フジクロームT64（RTP120））を使用した。

写真記録は、原則として、中判カメラ、デジタルカメラともに同一カットを撮影し、デジタルカメラでは、この他に、調査状況写真や途中経過写真等を撮影し、調査記録の一助として活用した。

<平成17年度、18年度共通作業>

#### (1) 1次整理

出土遺物は、調査終了後に水洗し、分類、遺物カード作成、注記等の一次整理作業を行った。注記は遺跡名（TJ05及びTJ06）、遺構またはグリッド名称、層位の順に、白または黒のポスターカラーで記入し、その上にラッカーを塗布して保護した。

#### (2) 2次整理

接合、実測、製図、集計、写真撮影、記録類の整理等の二次整理作業は、平成18年調査出土遺物の一次整理作業終了後に、平成17年、平成18年の2カ年分をまとめて行った。

現地測量図面は、必要な訂正や変更を加え、1mm方眼紙に清書して素図を作成した。

写真記録のうち、スライドフィルムは、撮影順にスライドアルバムに収納し、撮影時の記録（日付、撮

影方向、F値、フィルム番号、写真番号、撮影対象、特記事項）を記入した写真台帳を作成した。デジタルカメラ撮影分は、全てL判（12.5cm×8.7cm）に出力し、アルバムに収納した。オリジナルデータは、CD-Rに保存した。

### （3）保管

出土遺物は整理作業終了後に遺物登録台帳を作成し、掲載・非掲載、遺構・包含層、分類、出土グリッドなどの基準で分別して収納し、さらに、厚沢部町郷土資料館収蔵品として、コンテナ、ダンボールなどの梱包単位毎に「厚沢部町郷土資料館収蔵資料台帳」に登録した。

原図・素図等の図面類、写真記録は厚沢部町教育委員会で保管する。

### 3. 基本層序（図6）

基本層序の分類は、『館城跡 遺構確認調査報告書』（厚沢部町教育委員会、十勝考古学研究所1989年）のそれ（以下旧層序）を踏襲した。平成17年及び平成18年の発掘調査における観察結果を加えて以下にその特徴を示す。なお、基本層序の土色、土性は、平成17年調査の南側盛土西部（第1調査区）における断面観察の結果を基準としているので、第1調査区の断面図（図8）も併せて参照されたい。

遺物包含層はI層及びII層で、III層以下は腐植土の発達しない旧石器時代以前の堆積層の可能性が高い。

I層：表土・耕作土（黒褐色（10YR2/2）埴壌土 粘性中 堅密度堅）

草の根の混じる地表面下約10cmの自然堆積層及び耕作土を総称した。旧層序I層に相当。

II-1層：黒色（10YR2/1）埴壌土 粘性中 堅密度堅

旧層序II層に相当。

II-2層：にぶい黄橙色（10YR6/4）砂壌土 粘性弱 堅密度軟

降下火山灰と考えられる砂質の堆積層である。遺跡周辺では、平坦地で約5cmの層厚が一般のようである。旧層序III層に相当。

II-3層：黒褐色（10YR2/3）埴壌土 粘性中 堅密度堅

土性はII-1層に似る。黄色味を帯びるのはII-2層の影響と推測する。旧層序IV層に相当。

II-4層：黒色（10YR2/1）埴壌土 粘性中 堅密度堅

土性、土色とともにII-1層によく似るが、土質の粒状性がやや緻密で、土色はやや明るいように感じる。旧層序V層に相当。

III層：褐色（10YR4/6）埴壌土 粘性中 堅密度堅 旧層序VI層に相当



図6 基本層序模式図



## IV章 遺構と出土遺物

### 1. 南辺の堀・土塁の調査（図7）

#### （1）第1調査区（図8）

調査の目的：本調査区は、堀・土塁の構造の把握及び、昭和30年代に行われたと考えられる造成工事の影響を確認することを目的とし、堀及び土塁が最も良好に残存すると思われる箇所にトレーニングを設定した。

現況では土塁は高さ約60cmの高まり、堀は深さ約60cmの溝として、地表面で確認できる。堀の中央から北へ約14mのところに約40cmの段差があり、段差の北側は、人為的な削平によって造成されたと考えられる平坦地が広がる。付近は、昭和30年代に挽馬競馬場造成が行われ、表土が掘削されたと伝えられるが（『厚沢部町史櫻島』p.384）、平坦面の造成そのものが、挽馬競馬場造営に伴うわけではないようである（i）。

**土層：**土層1はほぼ純粋な黄褐色シルト質壌土で人為的な堆積層、土層2は基本層序I層に相当する自然堆積の黒褐色壌土、土層3は基本層序I層に相当し、土塁の崩落土を含む。土層1～3までが土塁構築後の堆積層である。土層4～6が土塁本体に相当する堆積層である。土層7にはぶい黄褐色の降下火山灰で、1694年降灰の駒ヶ岳C2火山灰（Ko-c2）に比定されている（V章参照）。土層8～12はそれぞれ基本層序のII-1層、II-2層、II-3層、II-4層、III層に相当する。II-2層相当の土層9は白頭山苦小牧火山灰（B-Tm）に比定されている。

**出土遺物：**銅製品1点と陶磁器1点が出土している。

**考察：**トレーニング北端では深度約50cmの削平がみられる。土塁北側基底部からトレーニング北端までの自然堆積層は、基本層序II-3層以下（断面図土層10～12）ではほぼ良好に保存されている。しかし、堀の南側では基本層序II-1層、II-2層が安定して残存することから考えて、土塁と削平された平坦面の間の区域も、何らかの削平を受けている可能性がある。土塁北側のB-6-bグリッドで、館城跡に関する陶磁器及び銅製品が出土していることから、土塁北側の地域が削平を受けているとすると館城築城時になされた可能性が高い。土層1はほぼ純粋な黄褐色シルト質壌土で、短期間による人為的な堆積と考える。第2調査区の土層2に対応する可能性が高く、城跡南東部の低湿部を埋め立てた際に形成された堆積層と推測する。

土塁の造成方法は厚さ約20cm程度を1単位として、順に積み上げていったと考えられる。断面では、最下段の1単位（土層4～6）のみを土塁の本体として捉え得たが、本来は2～3段以上で構築されていたものと推測する。版築に近い構築方法がとられたと考えるが、土質に繊まりがなく、堅固に突き固められてはいない。土塁の基底部は、土層9の黄橙色火山灰層（B-Tm）より上にあり、土層9の直上には厚さ約2cmの黒色土が堆積していることから、火山灰降下から土塁構築までは、時間差を示すものと考えられる。

堀の南側は、南に向かって緩い登り勾配となっている。自然堆積層の残存状況は極めて良好で、本遺跡の基本層序の確認基準とした箇所である。ここでは基本層序で示した層位の他に、ぶい黄褐色の火山灰（土層7）と、その漸移層が確認できる。人為的な地形の変化は受けていないと判断した。

#### （2）第2調査区（図9）

調査の目的：南辺土塁は第1調査区の東側約5mのところでいったん途切れ、そこから約10m北へ筋を変え、再び東へ延びている（図7）。土塁がいったん途切れる箇所より東側における堀・土塁の構造や構築方法の比較、館城跡南東部の堀と土塁の様相を確認することを目的として調査区を設定した。

**土層：**土層1は基本層序I層に相当する自然堆積層、土層2～3は、土塁南側の低湿部を埋めるように堆積する褐色土を主体とする均質な堆積層で、土層3では木片が15%混入する。土層4は低湿部への自然堆積層である。土層5～16は土塁本体を構成する人為堆積層である。土層17は基本層序III層に相当する自然

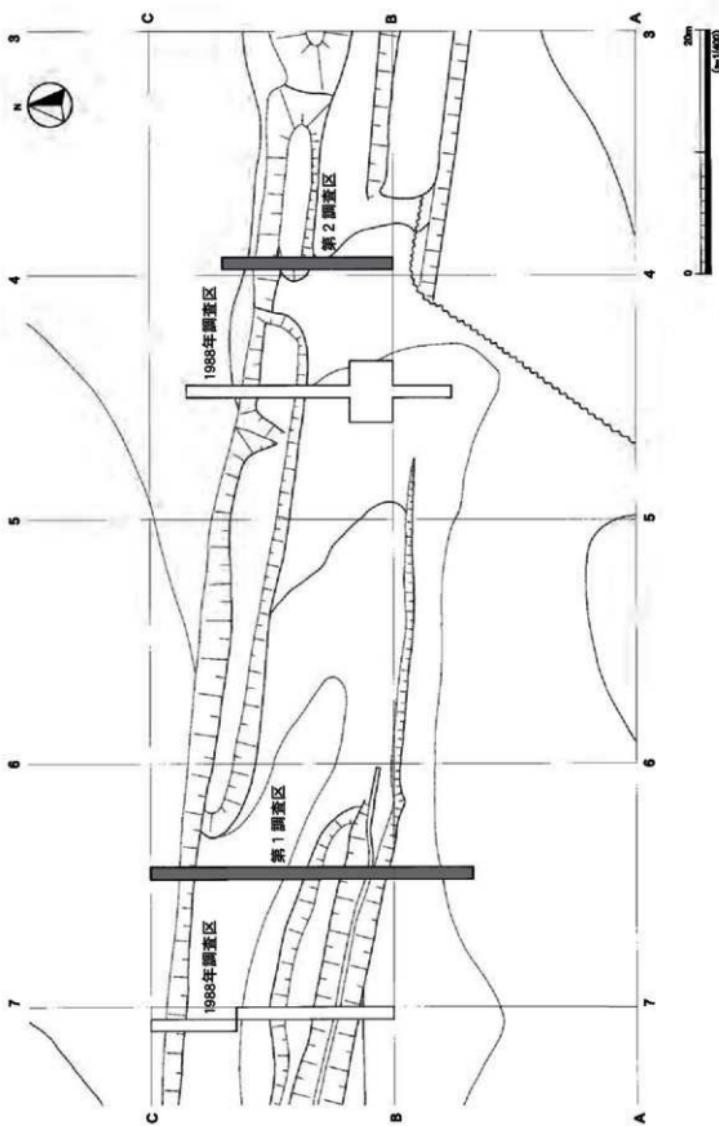


図7 南辺土壤・堀調査区配置図

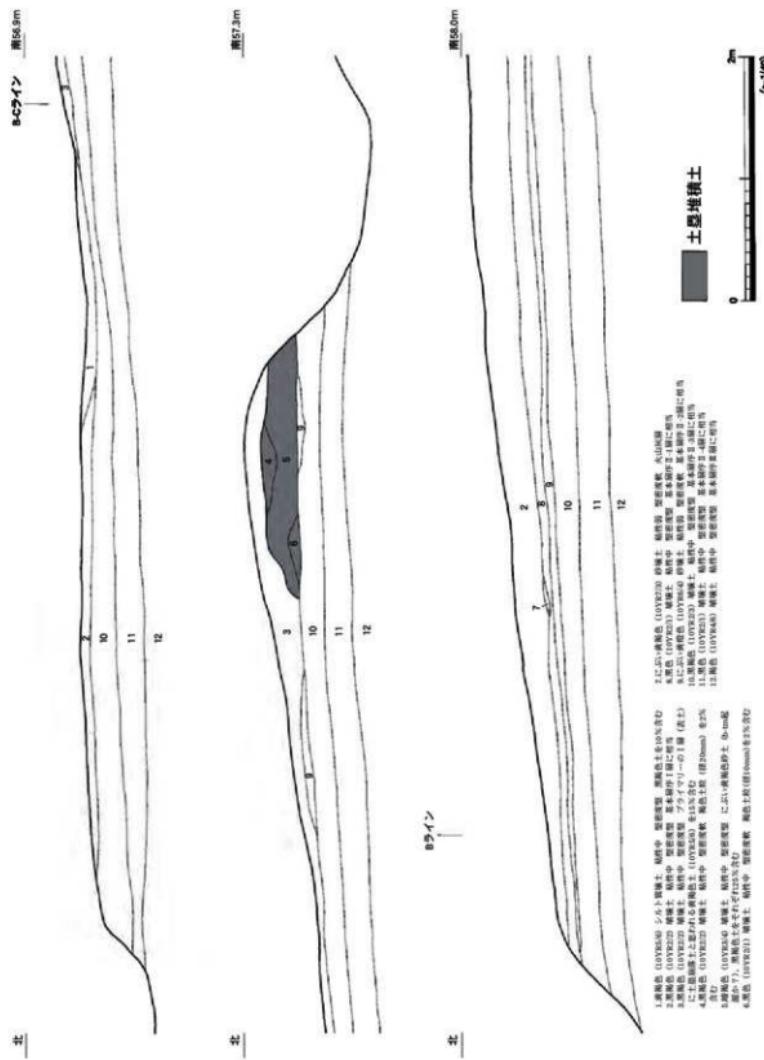


図 8 第1調査区土層断面

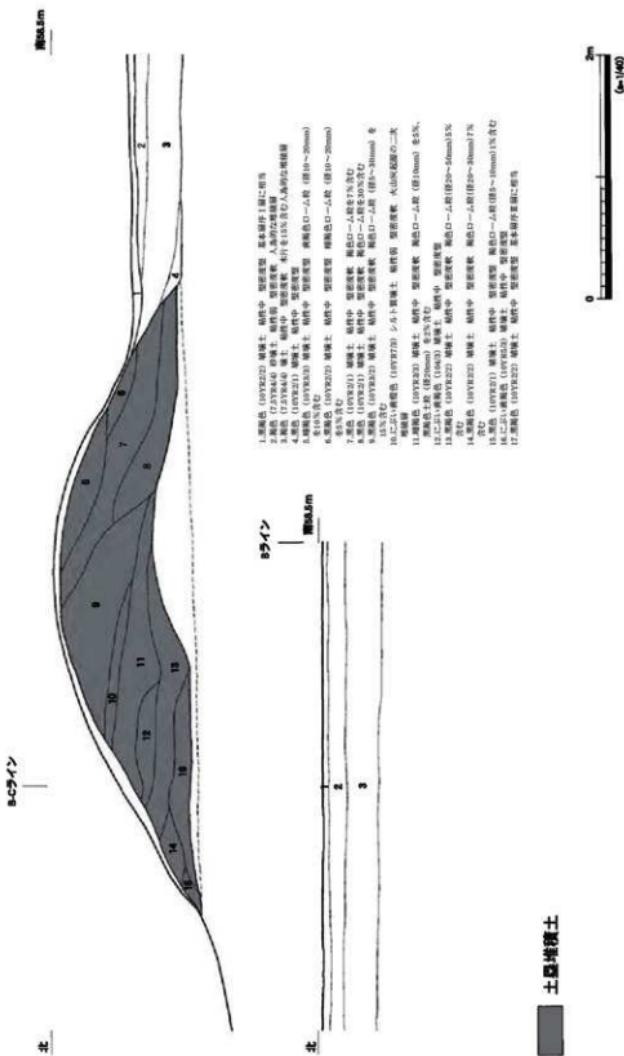


図9 第2調査区土層断面

堆積層で、トレンチ1で確認したⅢ層相当層と比較して、暗い色調である。

**考察：**調査区南側の低湿部は、底面が平坦で、土壌の基部との接点付近で、急角度で立ち上がることなどから人為的に掘削されたものと推測する。土層2～3は、この低湿部を埋めるために人為的に埋め戻された堆積層と考えられる。後世の整地等によるものであろう。

土壌の構築面は、基本層序Ⅲ層（土層17）に構築されていることから、土壌の構築以前にⅠ層～Ⅱ-4層までの自然堆積層（深さ約50～1m）が削平されていたと考えられる。

本調査区における土壌の堆積構造は、第1調査区で確認した土壌の断面構造とはやや異なり、土層の厚さや幅に規則性がみられない。堆積方向は、北から南である。構築当初から一定の幅や高さの構造物を意図していたと考えられる第1調査区の土壌と比較して、第2調査区の土壌は、構築手順に規則性がみられず、第1調査区とは当初から異なる工法によって構築されたと考えられる。

- （1）挽馬競馬実施に関わった千場正（大正3年生、館町在住）、史跡に隣接して住宅のあった只野壽光（昭和16年生、館町在住）は、「史跡郭内南東部は、挽馬競馬場造成以前から削平されていた」（平成18年7月24日聴取）とする。

## 2. 「散兵壕跡」断面確認調査（図10～13）

**調査の目的：**「散兵壕跡」の構造及び構築年代を判断する目的で、断面確認調査を実施した。

「散兵壕跡」は1968年、館城跡南に位置する通称「円山」の公園化に伴う造成作業中に発見された。「戊辰の役当時の散兵壕らしきもの」（昭和43年8月13日付厚教社）と考えられているが、これまで、分布調査や発掘調査は行われていない。

### （1）「散兵壕跡」1（図11）

**土層：**土層1は基本層序Ⅰ層に相当する自然堆積層である。土層2～3は「散兵壕跡」の窪みに堆積した自然堆積層である。土層2は基本層序Ⅱ-2層に相当するとと思われる、にぶい黄橙色の火山灰で、自然科学的分析の結果、1694年降灰の駒ヶ岳C2火山灰（Ko-c2）に比定されている（V章参照）。土層3は暗褐色の漸移層である。土層6～13は褐色で礫混じりのロームを中心とする堆積層で、基本層序Ⅲ層以下の土層が二次的に移動したものである。土層14～17は、礫を特に多く含み、より深い層位に位置する自然堆積層が二次的に移動したものである。

**考察：**「散兵壕跡」1を構成する土層は、①土壌状の高まり（土層4～13）、②窪みの基底部（土層14～17）、③窪みの埋土（土層2～3）に大別できる。「散兵壕跡」が土坑と土壌を組み合わせた人為的な構築物だとすると、①は人為的な盛土状の堆積層、②、③は溝状の掘り込みに対する自然堆積層となるはずであるが、①では人為的に土壌状の構造を構築する際にみられる規則性のある堆積構造が確認できず、均質で無秩序な堆積構造となっている。溝状の掘り込みは確認できない。②については①と同様の均質で無秩序な堆積構造である。③は周辺（特に斜面上方）からの流入土壤や新たに形成された腐植土、降下火山灰などによって形成された自然堆積層である。以上のことから、①及び②は立木の転倒によって生じた土層の擾乱を示す堆積であり、③は立木の転倒によって生じた窪みに形成された自然堆積と判断する。窪みに1694年降灰のKo-c2が堆積することから、形成年代は1694年以前である。

### （2）「散兵壕跡」2（図12）

**土層：**土層1は基本層序Ⅰ層に相当する自然堆積層で、「散兵壕跡」2全体を薄く覆う。土層2～3は窪みに堆積した自然堆積層で、土層2が基本層序Ⅰ層相当、土層3がⅡ層に相当する。土層4～22は褐色で礫混じりのロームを中心とする堆積層で、基本層序Ⅲ層以下の土層が二次的に移動したものである。

**考察：**堆積構造は、「散兵壕跡」1によく似ており、①土壌状の高まり（土層4～22）、②窪みの埋土（土層2～3）に大別できる。「散兵壕跡」1と同様、①では人為的に土壌状の構造を構築する際にみられる規則

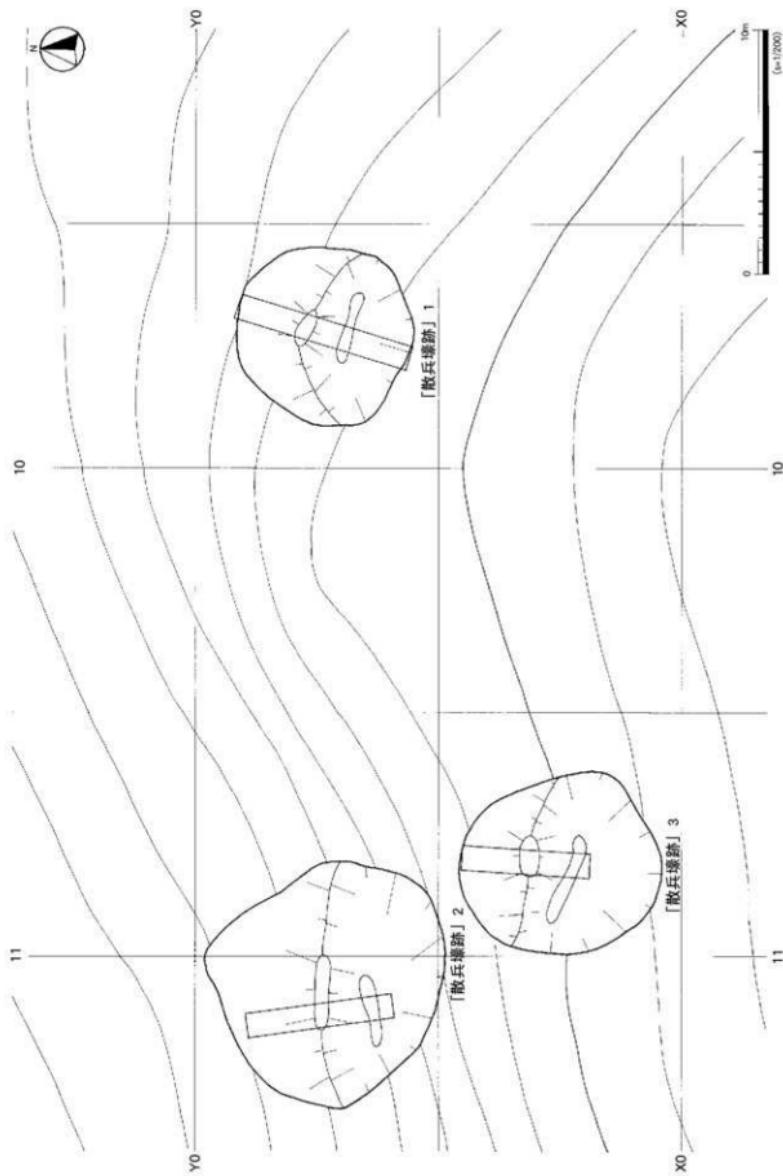


図10 調査対象「散兵壕跡」の配置

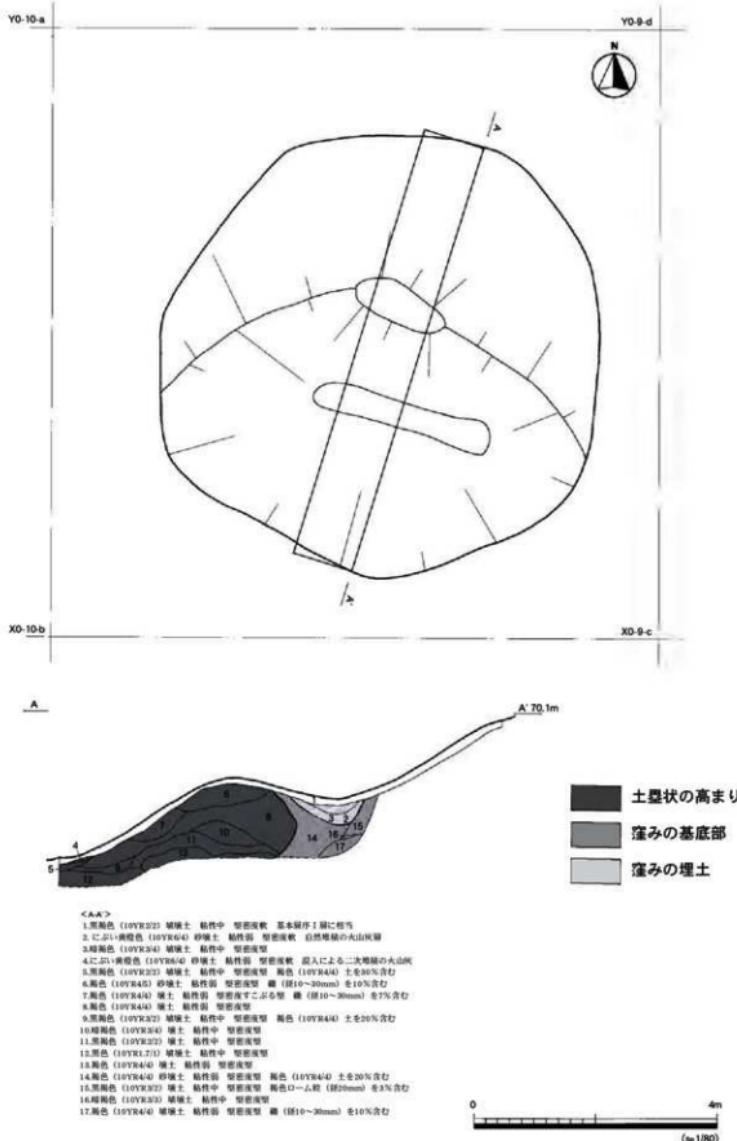


図11 「散兵壕跡」 1

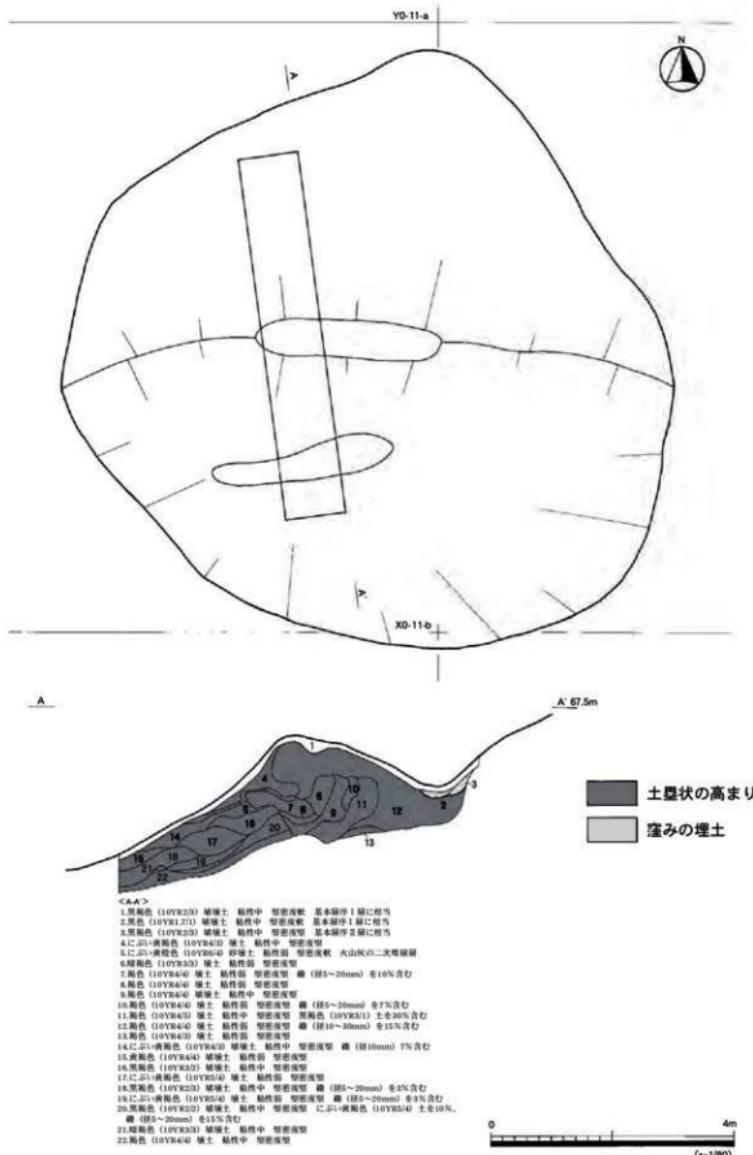
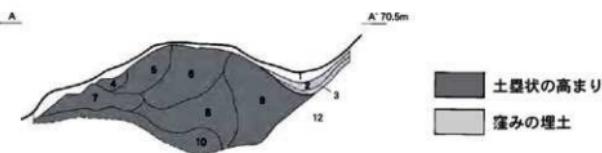
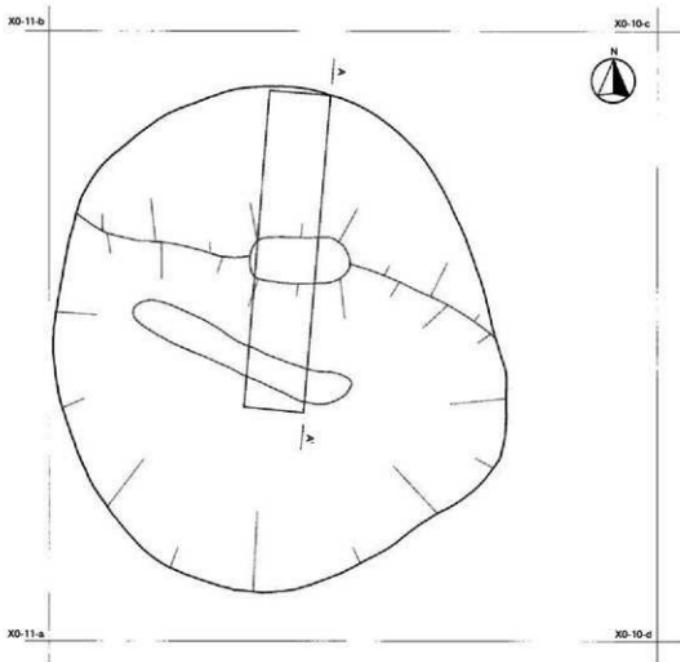


図12 「散兵壕跡」 2



- <AA'>
1. 黄灰褐色 (10YR4/1) 硬塑土、粘性弱、堅密度軟、基本層序上層に相当
  2. 黄褐色 (10YR7/6) 硬塑土、粘性弱、堅密度軟、火山灰質
  3. 黄褐色 (10YR6/2) 硬塑土、粘性弱、堅密度軟
  4. 黄・黄褐色 (10YR4/0) 硬土、粘性弱、堅密度堅
  5. 黄褐色 (10YR4/4) 硬土、粘性中、堅密度堅
  6. 黄色 (10YR4/4) 硬土、粘性中、堅密度堅 ■ (粒5~20mm) 7%含む
  7. 黄褐色 (10YR4/2) 硬土、粘性弱、堅密度堅
  8. 黄色 (10YR4/4) 硬土、粘性弱、堅密度堅
  9. 黄褐色 (10YR5/0) 硬土、粘性弱、堅密度堅 ■ (粒10~50mm) 15%含む
  10. 黑褐色 (10YR3/2) 硬塑土、粘性弱、堅密度軟



図13 「散兵壕跡」 3

性のある堆積構造が確認できず、比較的均質で無秩序な堆積構造である。②の下位では溝状の掘り込みは確認できない。したがって、「散兵壕跡」1と同様、立木の転倒によって生じた自然地形と判断する。

### (3) 「散兵壕跡」3 (図13)

**土層：**土層1は基本層序I層に相当する自然堆積層である。土層2～3は窪みに堆積した自然堆積層で、土層2が明黄褐色の火山灰、土層3は窪みに形成された自然堆積層である。土層4～10は礫を含む褐色ロームを中心とした堆積層で、基本層序III層以下の土層が二次的に動いて形成されたものである。

**考察：**堆積構造は、「散兵壕跡」1、2によく似ており、①土壘状の高まり（土層4～10）、②窪みの埋土（土層2～3）に大別できる。「散兵壕跡」1、2と同様、①では人為的に土壘状の構造を構築する際にみられる規則性のある堆積構造が確認できず、比較的均質で無秩序な堆積構造である。②の下位では溝状の掘り込みは確認できない。したがって、「散兵壕跡」1、2と同様、立木の転倒によって生じた自然地形と判断する。

## 3. 北辺の堀の調査 (図14～15)

**調査の経過：**平成元年(1989)に行われた発掘調査では、館城跡北東部にあたる位置で堀及び柵列が検出されており、これらの堀・柵列は、M-4グリッドでほぼ90°方向を変えて南へ向かい、L-4グリッドで途切れていることが確認されていた(図1参照)。これらの調査結果をもとに、北側の堀及び柵列の位置を予想し、L-6-c～M-6-c間に第3調査区を設定した。

第3調査区の調査の結果、堀及び柵列は検出されたかったため、第3調査区から西へ30mのM-8-a～O-8-a間に第4調査区を設定した。第4調査区からも堀及び柵列は検出できなかつた。このため、館城跡北面には堀が構築されず、自然の小河川が区画の役割を果たしていた可能性があると考えた。小河川の流路は、南東から北西方向と考えられたため、N-9-a～N-13-a間に第5調査区を設定した。さらに、11ラインから12ライン付近を北上すると予想された西辺の堀及び柵列の確認作業も、同一調査区内であわせて行った。また、M-10-a～N-10-a間に第6調査区を設定し、堀・柵列の検出を行った。

**調査の結果：**堀及び柵列は、いずれの調査区からも検出されなかつた。小河川の流路については、N-9-a～N-10-a間に2箇所の黒色土の落ち込みを検出した。湧水のため、黒色土の落ち込みの掘り下げは断念したが、館城北方を流れる小河川の跡と推測する。検出位置から考えて、南東から南西へ流れる2本の流路であろう。

第5調査区を13ラインまで延長したことにより、館城西側の堀がNラインまで達していないことが確認できた。

**考察：**いずれの調査区でも堀を検出できなかつたことから、館城跡北面には堀が設けられなかつた可能性を考える必要がある。北側の区画施設としては、自然の流路や、より検出しにくい柵列などがあつた可能性を検討する必要がある。

## 4. 西辺の堀の調査 (図16)

**調査の経過：**平成2年の発掘調査により、G-12グリッドまでの堀・柵列の所在が確認されていた。平成18年の調査では、平成2年に堀・柵列を確認したG-12グリッドの掘削を行い、堀(SD1)・柵列(SA1)を再検出し、ここから、随時調査区を拡張しながら調査を進めることとした。G-12-bグリッドでSD1が西へほぼ直角に屈曲し、屈曲した地点から約8mのところで途切れていることを確認した。SD1の延長を確認するため1ラインに沿って調査区を設定したところ、堀(SD2)・柵列(SA2)を検出した。ここから、南側へ調査区を広げ、SD2の南端を検出した。

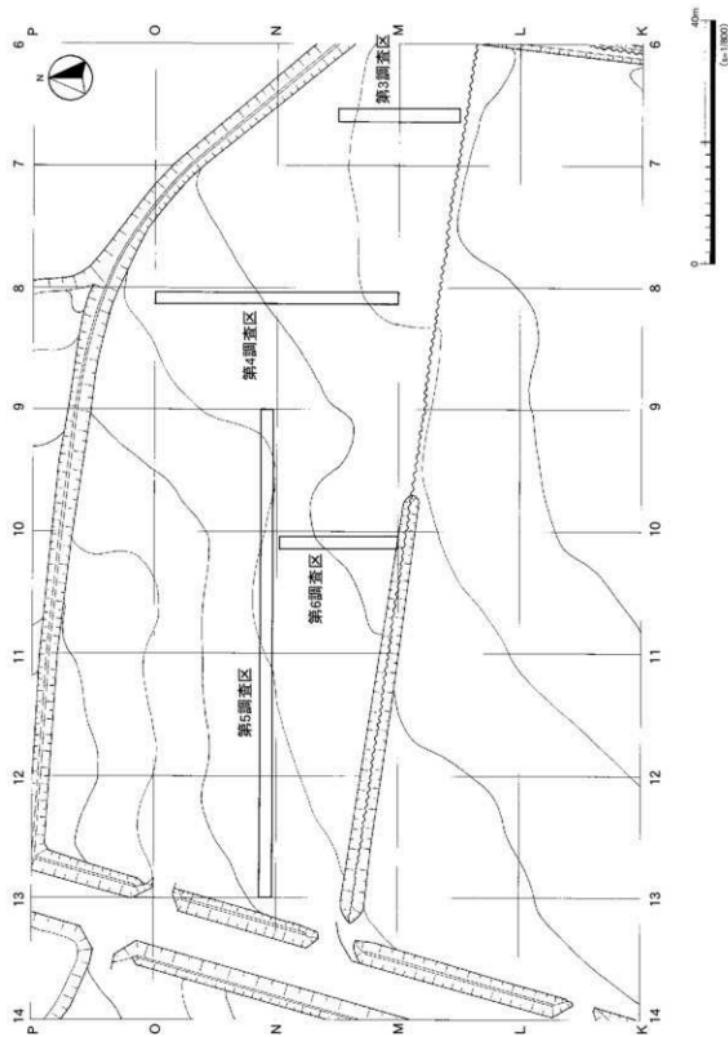


図14 館城跡 北側調査区配置図

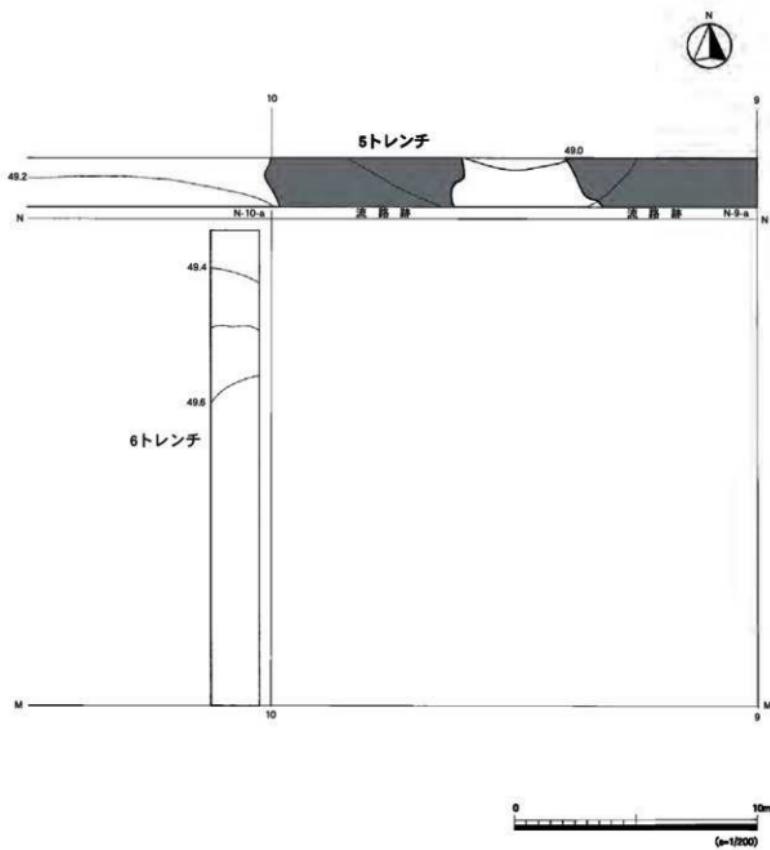


図15 館城跡 北側流路検出状況

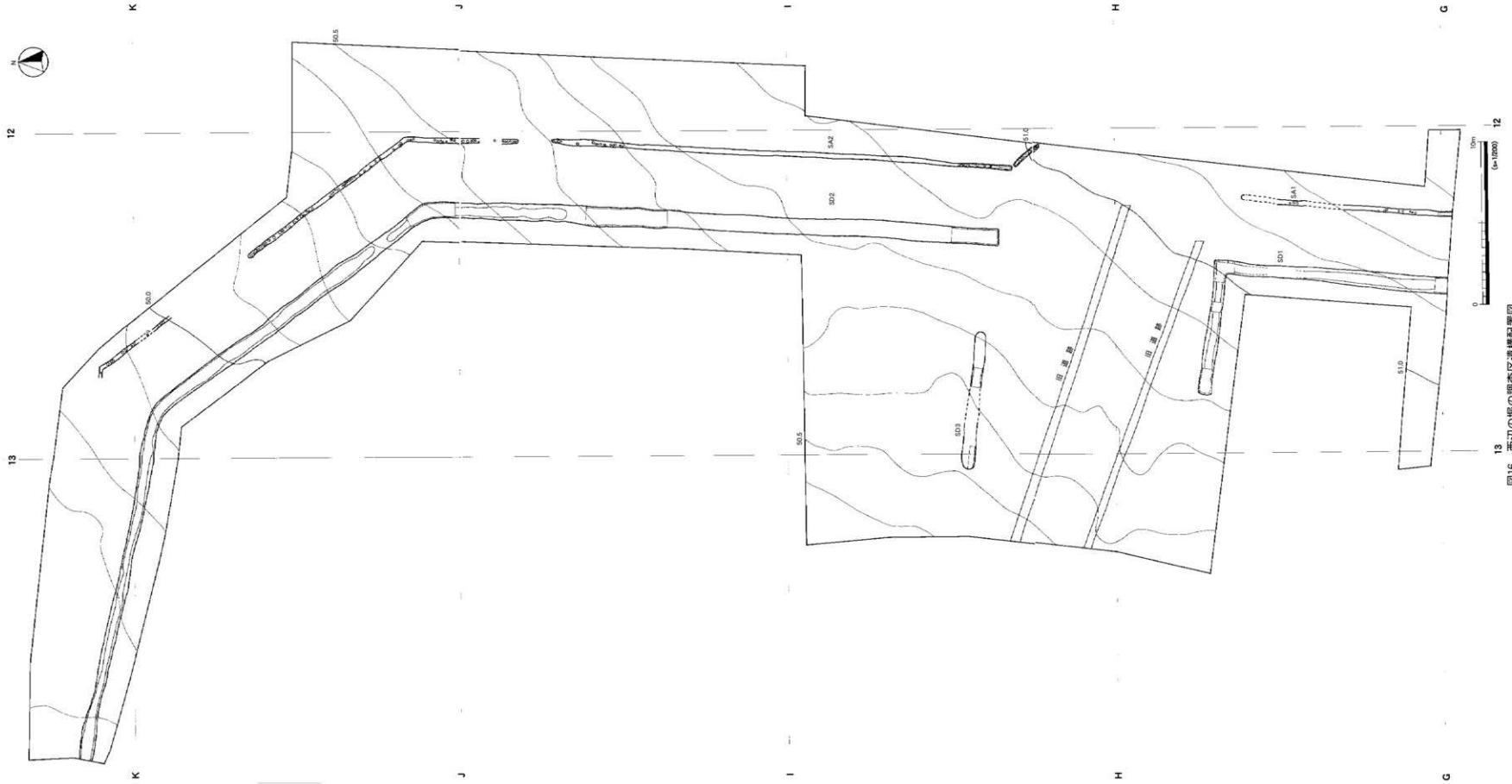


図16 西辺の堀の調査区遺構配置図

折り込みウラ 白

SD2 を検出しながら、北へ調査区を拡張したところ、SD2 は西へ屈曲し、K-13-d グリッドで調査区外西側へと続くことを確認した。

SD1、SD2 と並行する SA1、SA2 を検出するため、調査区を拡張すると共に、開口部を確認した H-12 グリッドを拡張した。

西辺の堀の延長で北辺の堀を確認することが不可能となったため、調査対象範囲における北辺の堀・柵列の所在を確認するため、12ラインに沿って、K-12-a ~ L-12-b に第11調査区、10ラインに沿って I-10-a ~ L-10-b に第12調査区を設置し、遺構確認を行った。

#### (1) SD1・SA1 調査区南端の調査（図17）

**規模・形状：**SD1 では、検出面での幅約1m、検出面からの深さ約10cm、底面は平らで箱堀状である。SA1 では、検出面での幅約30cm、検出面からの深さ約25cmで、底面には柱痕とみられる凹凸がある。

**方位：**SD1・SA1 ともに W-95°-E である。

**土層：**SD1 では、土層1～4は、Ⅲ層起源の褐色土を高い割合で含む。土層5～10は、黒褐色土を主体とし、Ⅲ層起源の褐色土を少量含む。SA1 はⅢ層起源の褐色土を高い割合で含む。

**出土遺物：**SD1、SA1 共になし

**考察：**SD1 の土層1～4は埋戻しによる堆積、土層5～10は自然堆積と判断する。土層1～4の示す埋戻しは、SD2 で確認された近代の陶磁器やビール瓶を伴う堀の埋戻しと同時期の所産であろう。

SA1 は、平面及び断面で柱痕を確認することができなかったが、坑底で柱痕を確認した。SA2 と同様、布掘の柵列である。

#### (2) SD1 屈曲部の調査（図18）

**規模・形状：**検出面での幅約70～80cm、検出面からの深さ10～15cmである。底面は平らで、壁はほぼ垂直に立ち上がる。

**方位：**W-8°-E。

**土層：**B-B' 断面土層1、C-C' 断面土層1～2は黄褐色土及び炭化物を含む。A-A' 断面土層1～4、B-B' 断面土層2～5、C-C' 断面土層3～4は黒褐色土を主体とする。

**出土遺物：**なし

**考察：**B-B' 断面土層1、C-C' 断面土層1～2は埋戻しによる堆積、A-A' 断面土層1～4、B-B' 断面土層2～5、C-C' 断面土層3～4は自然堆積と判断した。SD 2 で確認された、近代の陶磁器やビール瓶を伴う堀の埋戻しと同時期の所産であろう。

#### (3) SD2 南端の調査（図19）

**規模・形状：**検出面での幅約1m、検出面からの深さ約10cmである。底面は平らで、壁はほぼ垂直に立ち上がる。

**方位：**W-93°-E

**土層：**黒褐色土を主体とする自然堆積層である。

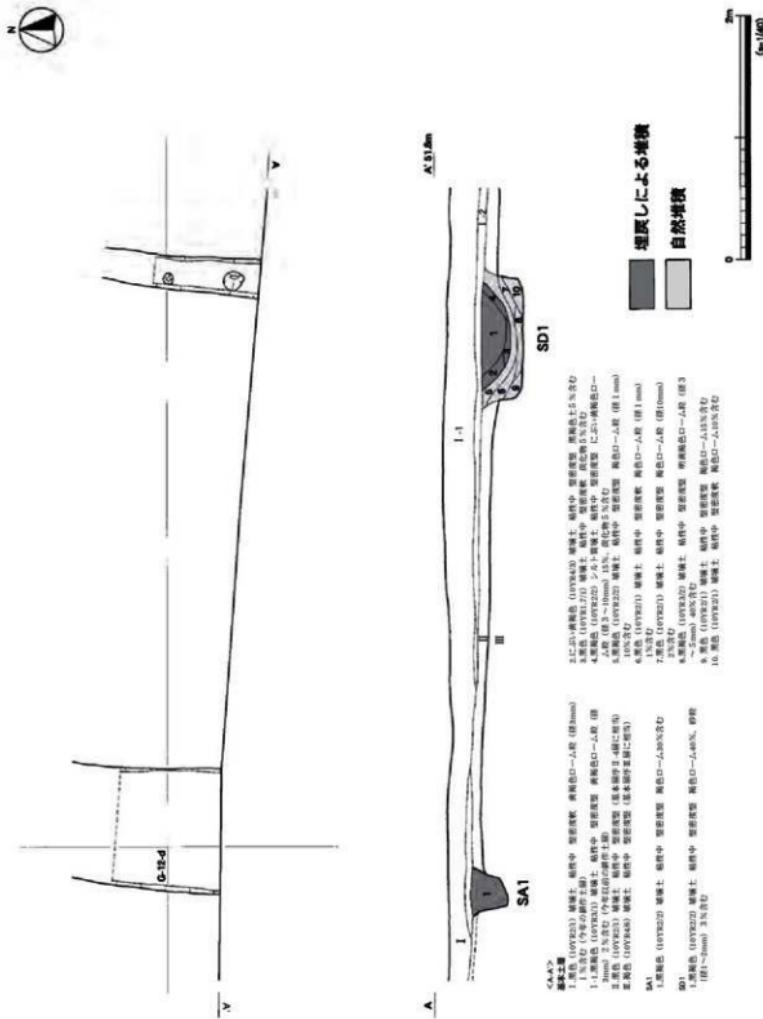
#### (4) SA2 南端の調査（図19）

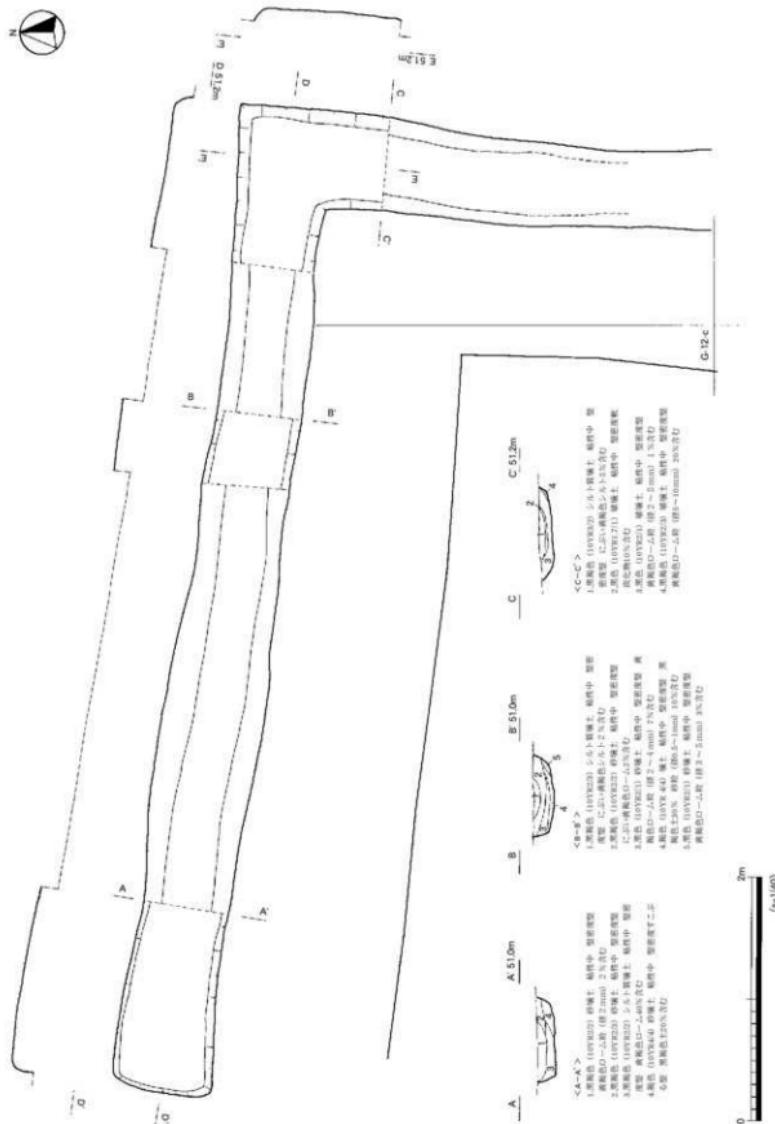
**規模・形状：**検出面での幅約30cm、検出面からの深さ約10cmである。SD2 南端と平行する位置から約0.7m 南で約45°東へ屈曲し、調査区外へ延びる。柱痕は、平面と断面の両方で確認した。柱痕の直径は約10cm、やや先細りの断面形である。

**方位：**W-93°-E、W-48°-E

**土層：**断面は柱痕を半裁したもので、土層1が柱痕である。土層2～3は掘方埋土である。

**考察：**布掘状の柵列である。柱が打ち込まれた形跡はなく、堀方底面に据えられたものである。





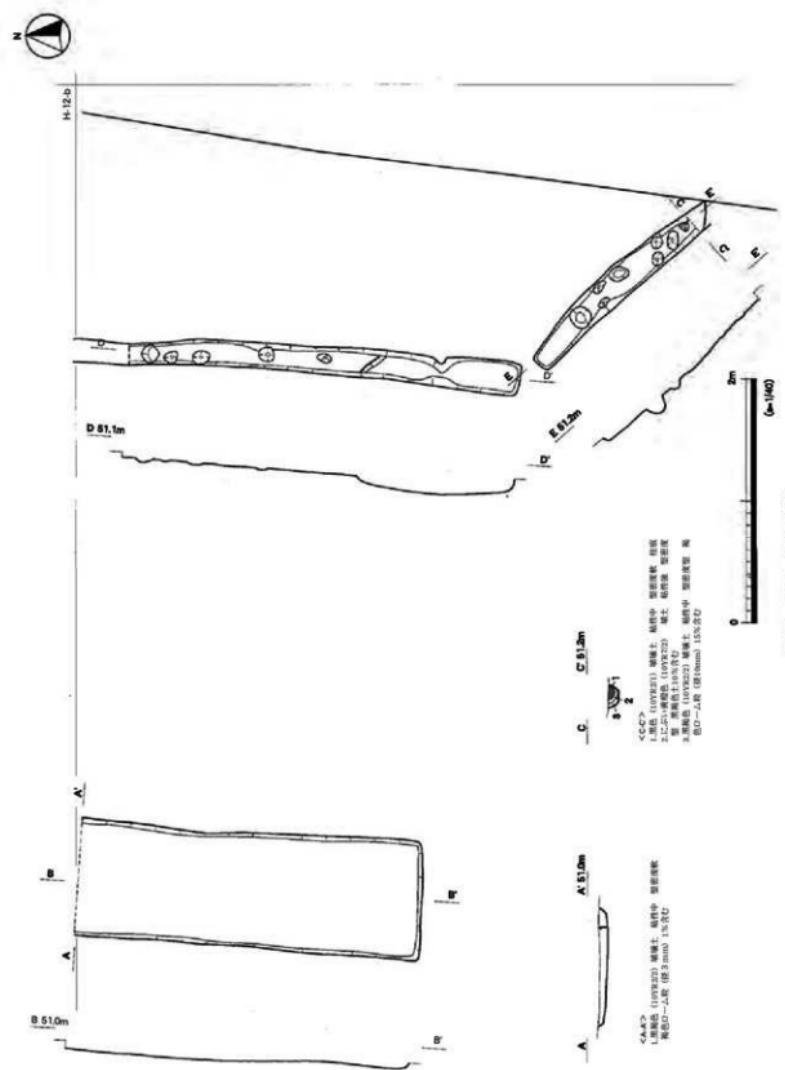


図119 SD2、SA2 南端

## (5) SD2 (I-12) の調査 (図20)

**規模・形状：**検出面での幅約1.1m、検出面からの深さ約10~20cmである。底面は平らで、壁はほぼ垂直に立ち上がる。

**方位：**W-93°-E

**土層：**断面 C-C' 土層 1~2 及び断面 D-D' 土層 1~2 と、断面 C-C' 土層 3~6、断面 D-D' 土層 3~5 の境界には厚さ 2~3mm の炭化物層が形成され、これを境に上下 2 層に大別できる。断面 C-C' 土層 1~2 及び断面 D-D' 土層 1~2 は黒褐色土主体で、炭化物、黄褐色土粒を含む。断面 C-C' 土層 3~6、断面 D-D' 土層 3~5 は黒色土主体で混入物は少ない。上下層の境界に形成される炭化物層は、SD2 のほぼ全面に広がる。炭化物層の下位に被熱痕は認められない。炭化物層は土壤化が進んでおり、植物質起源の炭化物であることは確認できるが、それ以上の構造は確認できない。

**出土遺物：**埋土上層の断面 A-A' 土層 1~2 及び断面 B-B' 土層 1~2 相当層から陶磁器、ビール瓶、ガラス瓶、金属製品等、近代の遺物が出土している。埋土下層の断面 C-C' 土層 3~6 及び断面 D-D' 土層 3~5 相当層からは出土していない。

**考察：**埋土下層は自然堆積、埋土上層は人為的な埋戻しによる堆積である。周辺からの土砂の流入などによる SD2 の埋没がある程度進んだ時点での、陶磁器やガラス瓶、金属製品等の廃棄を伴う埋戻しが行われたと推測する。埋土上層と埋土下層の境界に形成される炭化物については、直下の土層に被熱痕が認められないことから、その場で焼成されたものではなく、すでに炭化した状態で廃棄された可能性が高い。

## (6) SD2 (J-12-a) の調査 (図21)

**規模・形状：**検出面での幅70~90cm、検出面からの深さ約15cmである。底面は平らで、壁はほぼ垂直に立ち上がる。SD2 が約40度の角度で屈曲する地点である。

**方位：**W-93°-E (南側)、W-55°-E (北側)

**土層：**断面 A-A' 土層 1 及び断面 B-B' 土層 1~2 と、断面 A-A' 土層 2~5、断面 B-B' 土層 3~4 の境界には、炭化物層が形成され、これを鍵層として上下 2 層に大別できる。上下層の境界に形成された炭化物層は、SD2 (I-12) で検出した炭化物層と同一のものである。同じく被熱痕は確認できない。また、炭化物層の土壤化が進んでおり、その構造は把握できない。

**出土遺物：**埋土上層の断面 A-A' 土層 1 及び断面 B-B' 土層 1~2 相当層から陶磁器、ビール瓶、ガラス瓶が出土した。埋土下層の断面 A-A' 土層 2~5、断面 B-B' 土層 3~4 相当層からは出土していない。

## (7) SA2 (I-12-b) の調査 (図22)

**規模・形状：**検出面での幅約30cm、検出面からの深さ約10cmである。坑底はほぼ平らで柱痕とみられる凹凸がある。柱痕は、平面と断面の両方で確認した。柱痕の直径は約10cm、やや先細りの断面形である。

**方位：**W-93°-E

**土層：**土層 1 は暗渠の埋土、土層 2~4 は柱痕、土層 6 は堀方の埋土である。柱痕に木質は残存しない。

**出土遺物：**なし。

**考察：**布掘状の柵列である。柱が打ち込まれた形跡はなく、堀方底面に据えられたものである。

## (8) SD2 西端の断面調査 (図23)

**確認：**調査区西端の西側断面である。SD2 が調査区外へ延びたため、調査区西側の用水路法面を切って断面観察を行った。

**規模・形状：**底面の幅約45cm、ほぼ垂直に立ち上がり、底面から15cmのところで直線的に開きながら立ち上がる。断面上部は耕作により搅乱されているため、掘込み面は確認できない。

**土層：**土層 1 は褐色土粒を多く含む黒褐色土。土層 2 は混入物の少ない黒褐色土。土層 3 は薄い黒褐色土

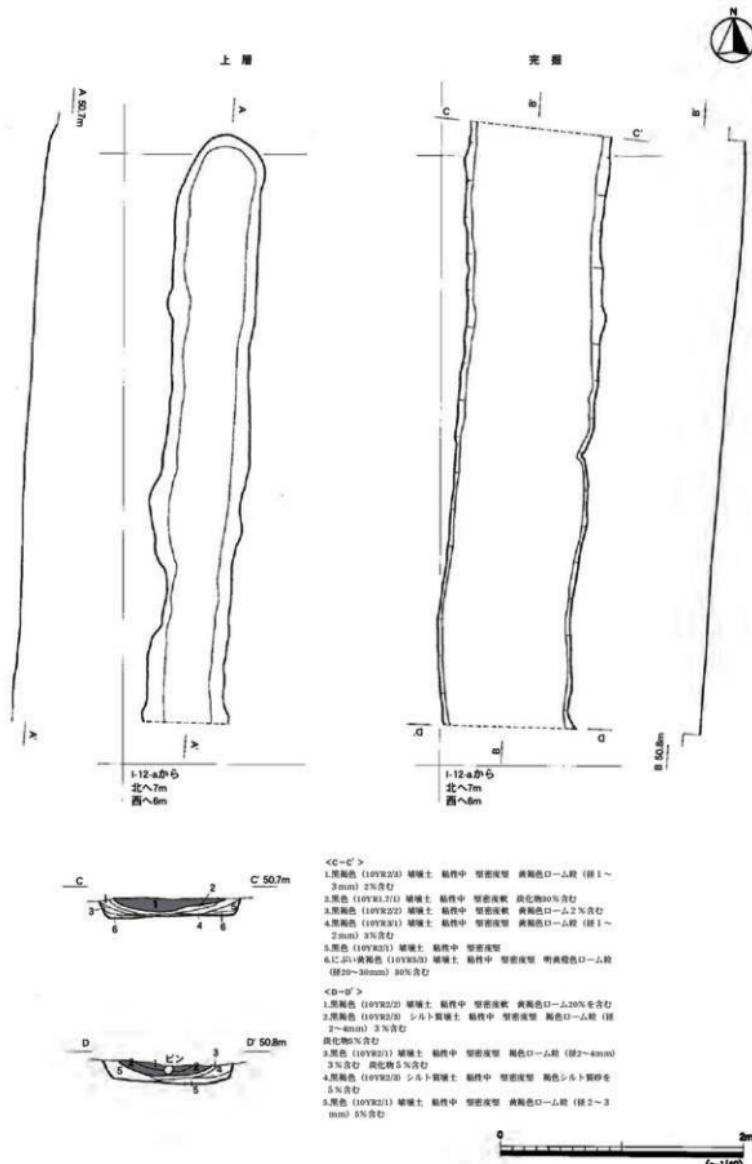


図20 SD2 (I-12)

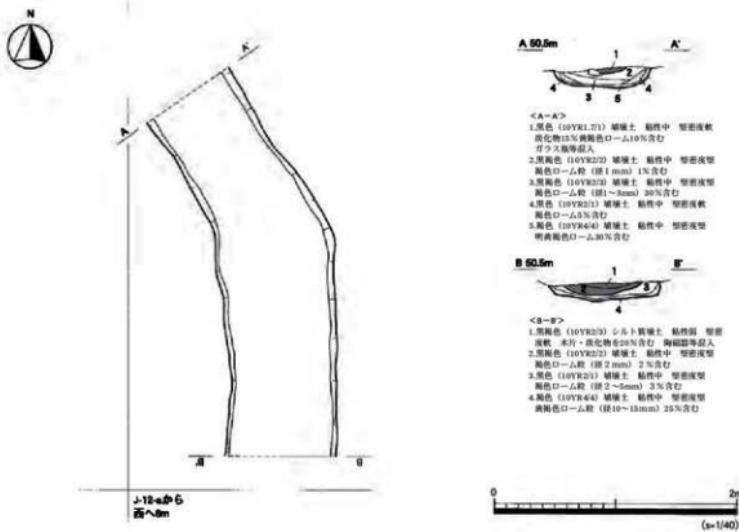


図21 SD2 (J-12-a)

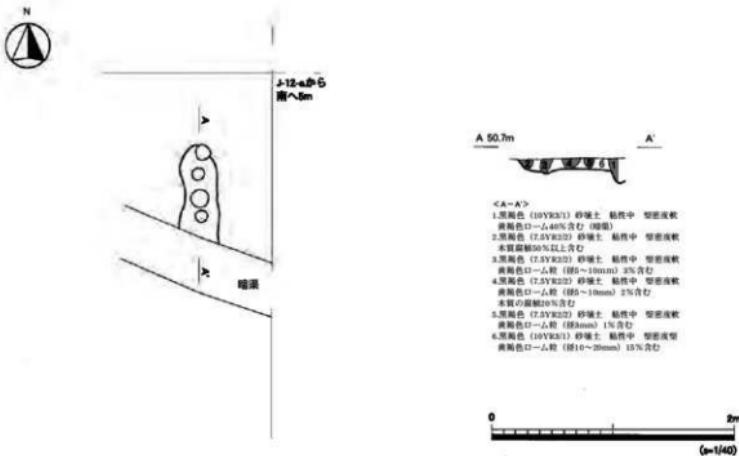
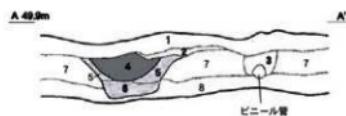
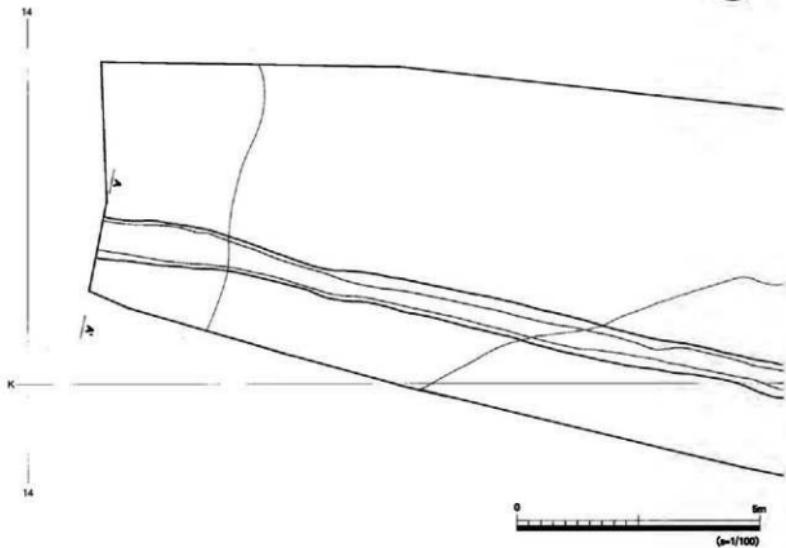


図22 SA2 (i-12-b)



- < A-A' >**
1. 黄褐色 (10YR2/3) 粘壤土、粘性中 塑密度軟 黄褐色ローム粉 (粒10~15mm) を含む
  2. 黄褐色 (10YR2/2) 粘壤土、粘性中 塑密度堅 黄褐色土
  3. 黄褐色 (10YR4/2) 粘壤土、粘性中 塑密度軟 黄褐色ローム粉 (粒5~10mm) を含む
  4. 黄褐色 (10YR2/2) 粘壤土、粘性中 塑密度堅 黄褐色土粒30%を含む
  5. 黑褐色 (10YR2/2) 粘壤土、粘性中 塑密度堅 黑褐色土粒1%を含む
  6. 黑褐色 (10YR2/2) 粘壤土、粘性中 塑密度軟 黑色土 (10YR2/2) と褐色土 (厚度5cm) の層
  7. 黑褐色 (10YR4/4) 粘壤土、粘性中 塑密度軟する層
  8. 黑褐色 (10YR6/6) 粘壤土、粘性中 塑密度中等の層
- 層底の性質自然実積



図23 SD2 西端断面

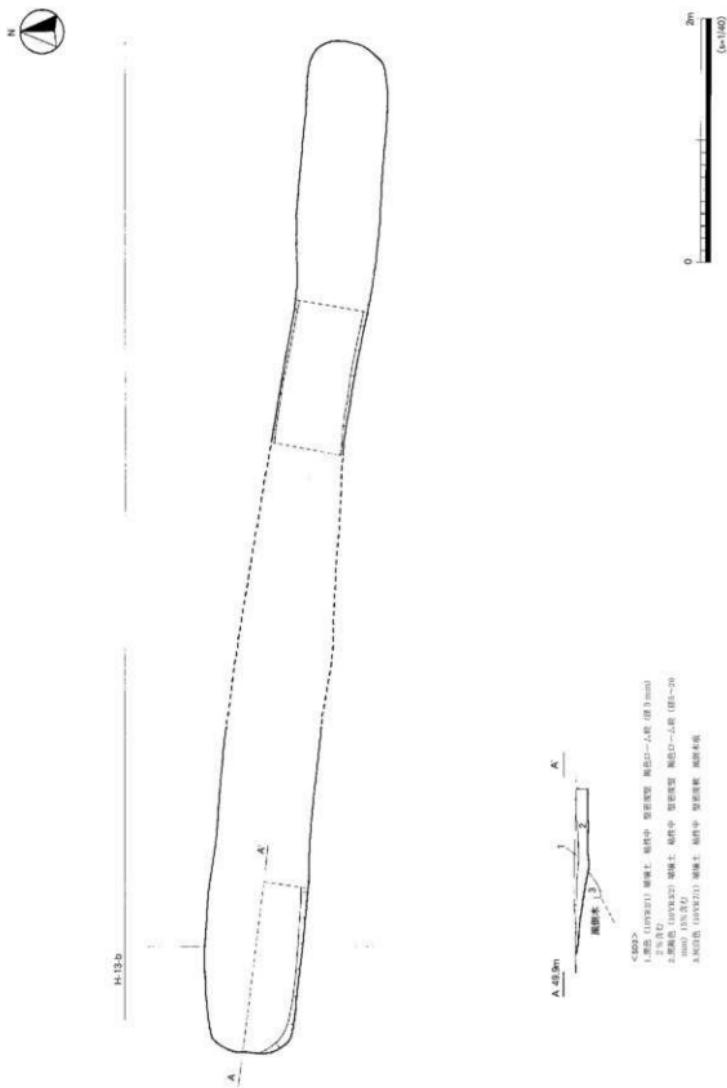


図24 SD3

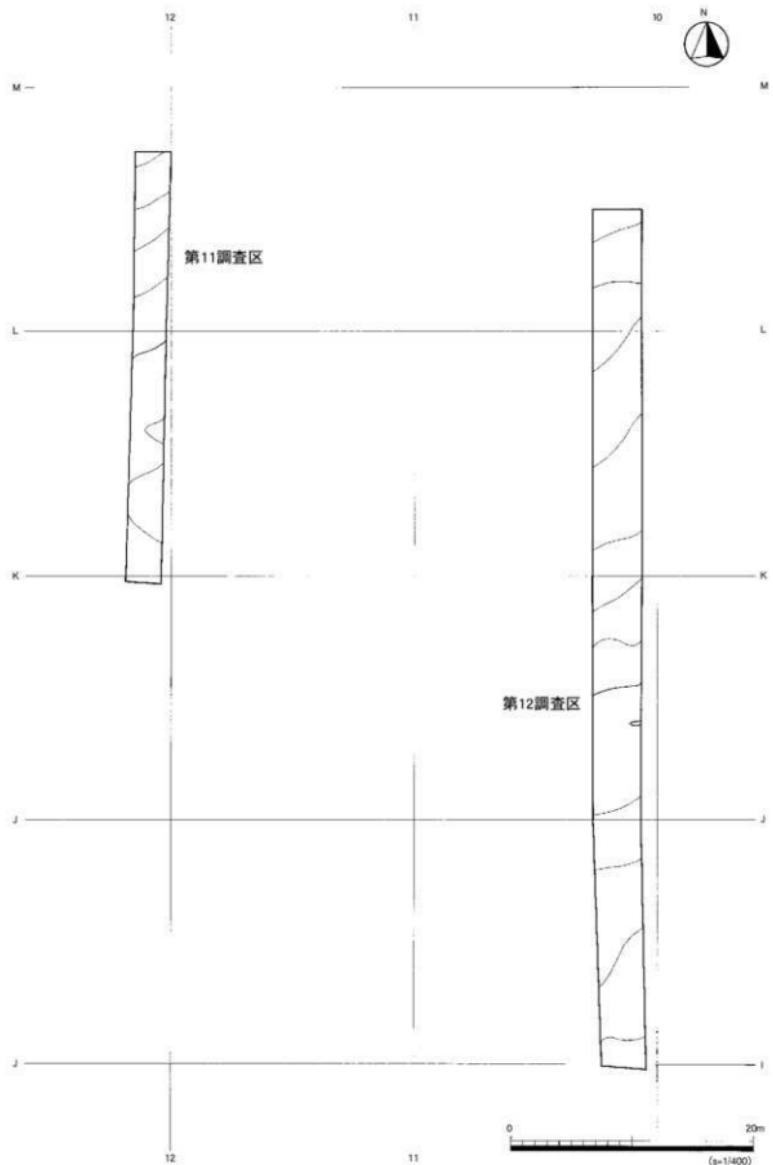


図25 第11、第12調査区配置図

と褐色土が交互に堆積して形成される。

**考察：**土層6は黒褐色土と褐色土とが互層をなすことから、堀底が水没した状況での堆積と推測する。土層5は周辺からの土砂の流入による自然堆積層と考える。土層4はⅢ層起源の褐色土を多く含むことから、人為的な埋戻しによる堆積層と考えられ、SD2 (I-12) などで検出した上層の堆積層に対応する。上部が開きながら立ち上がる断面形状については、壁面が崩落した痕跡がみられないことから、構築当初からの形状である可能性が高い。

#### (9) SD3 の調査 (図24)

**規模・形状：**検出面での幅80cm、検出面からの深さ約10cmである。底面は平らで、壁はほぼ垂直に立ち上がる。

**方位：**W-8°-E

**土層：**土層1～2はいずれも自然堆積で、土層2底面がSD3底面である。土層3は風倒木の堆積土である。

**考察：**西端は風倒木痕と切り合っているため、断面及び平面の観察から、図示した位置で立ち上がると判断したが、西側にさらに延びる可能性も捨てきれない。本遺構東端とSD2南端との間は幅5.4mの開口部となっている。

#### (10) 第11、第12調査区の調査 (図25)

**調査の経過：**SD2 及び SA2 が西へ屈曲し、調査範囲外へ延びたことにより、SD2、SA2 の延長上で、北辺の堀・柵列を検出することが不可能となった。このため、今年度調査区内で北辺の堀・柵列が所在する可能性のある K-12-a ~ L-12-b に長さ約35m、幅約3mの第11調査区、I-10-a ~ L-10-b に長さ約70m、幅約4mの第12調査区を設定した。

**調査結果：**いずれの調査区からも堀・柵列は検出できなかった。

### 5. 遺構出土遺物及び包含層出土遺物及び表採遺物

#### (1) SD2 出土近代遺物 (図26、27)

1～8は染付・色絵の碗類である。1は染付碗蓋で2の碗と対になる。雲形の弧状文と点が手書きされる。3はシダ類を含む草文が施される。4は青色と緑色を用いた菊花文、扇文が施される。印刷によるものであろう。5も4と同様に印刷による青色と緑色の扇文が施される。6は松文、魚文が施される。印判と考えられる。高台内に「白泉」の銘。7～8は文様の大半を欠く。8は4、5と同様、青色と緑色を用いた印刷による施文である。9は皿で、高台内露胎となる。見込みに笹文、菊文、波文、楓垣文、梅花文が施される。型紙摺によるものであろう。10は陶器製すり鉢である。口縁部は折り返されて玉縁状となる。御目幅約7cm、7～8条/cmである。

11～13は、「大日本麦酒株式会社」製ビール瓶である。11の地肌は滑らかではなく、細かい凹凸がある。12～13の地肌は滑らかである。13は透明感が高く、瓶裏側の浮彫りが判読できる。14は「東洋醸造株式会社」製のビール瓶で、肩部に「フジビール」の銘柄が浮彫りされる。透明感が高く、肩部では瓶裏側の浮彫りが判読できる。15は「日本麦酒純泉株式会社」製ビール瓶である。銘柄は「ユニオンビール」であろう。浮彫りは胴部下位のみで、肩部の浮彫りはない。透明感が高く、瓶裏側の浮彫りが判読できる。16は「日英醸造株式会社」製ビール瓶である。銘柄は、「カスケードビール」であろう。

17はガラス瓶である。透明でやや緑がかる。胴部下位に「OKAZAKI JAPAN ISHII&CO」の浮彫りがある。製造会社、銘柄共に不明。

18はランプ油壺である。透明でやや緑がかる。底部外面に「大正二年製」の浮彫りがある

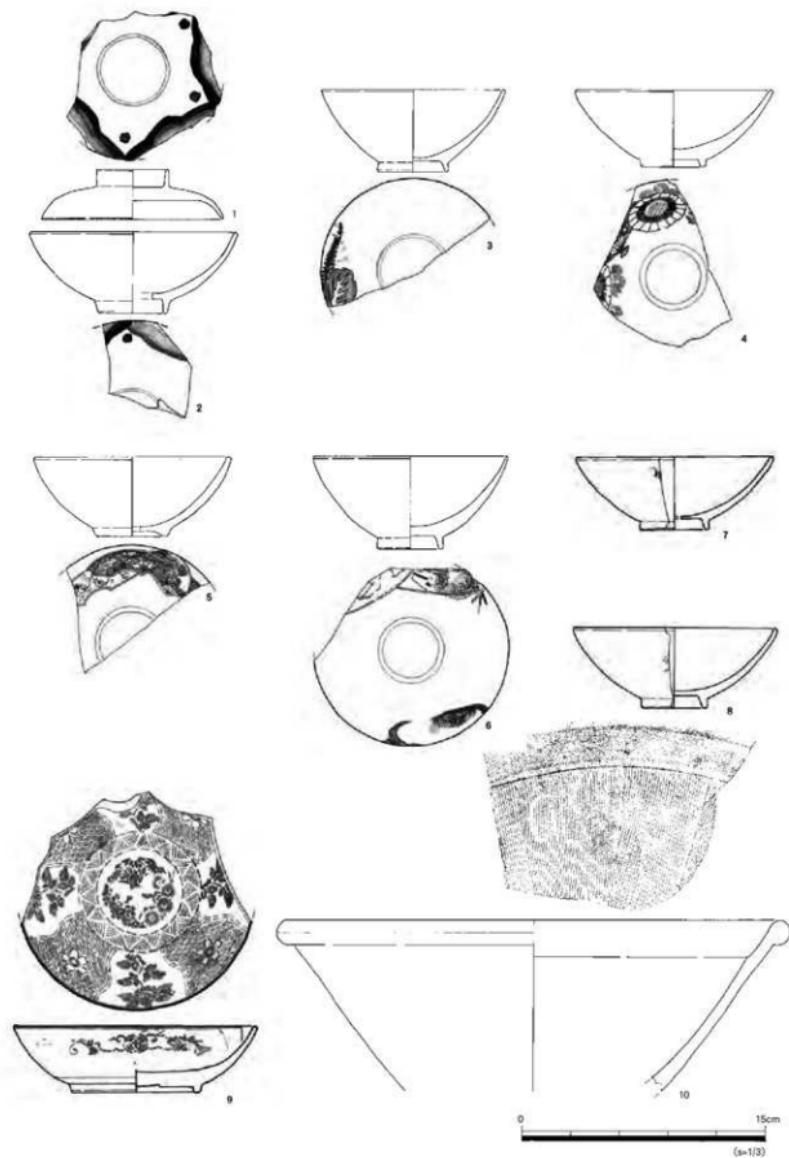


图26 SD2 出土近代遗物（陶磁器）

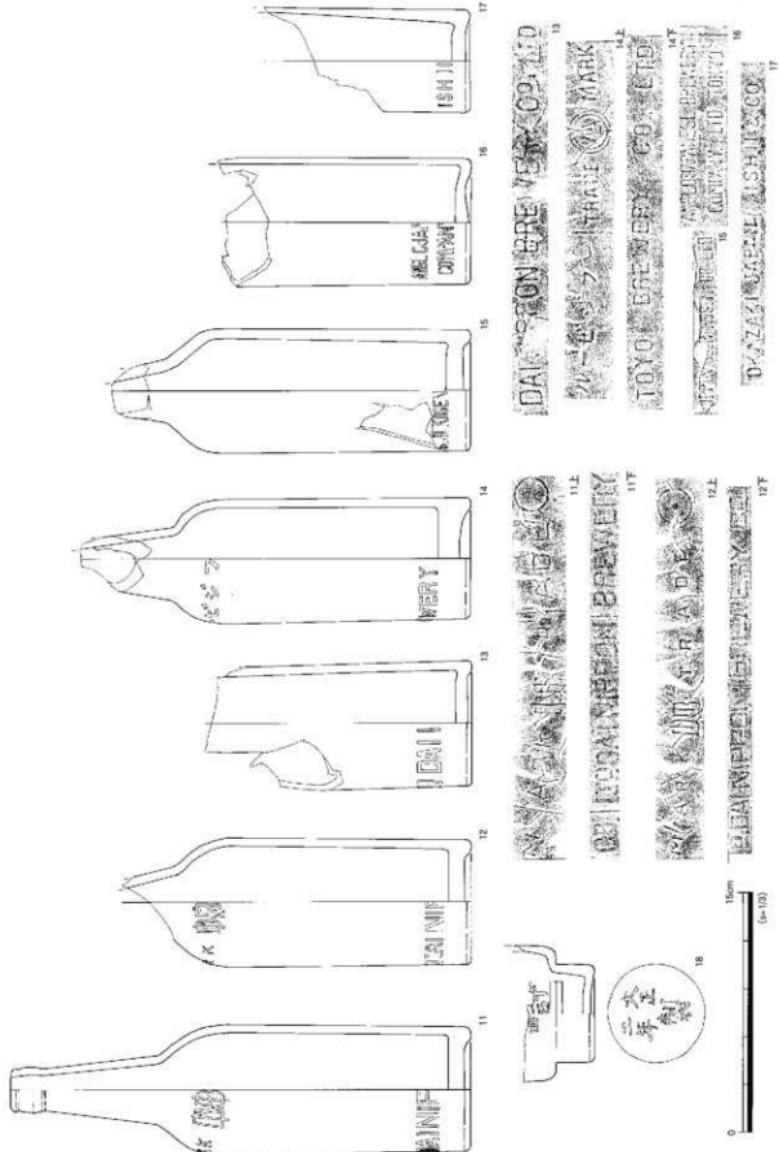


図27 SD2 出土近代遺物（ビール瓶及びガラス製品）

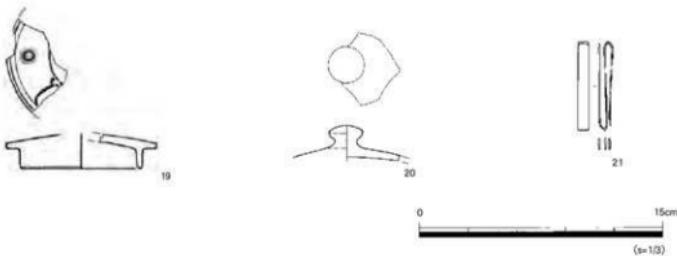


図28 包含層出土遺物

### (2) 包含層出土遺物 (図28)

19は第4調査区出土、20～21は第1調査区の堀・土塁の北側（城内側）から出土した。

19～20は陶器製の土瓶蓋である。19は外面灰釉、内面露胎、20は外面銅緑釉、内面露胎である。

21は板状の青銅製品である。厚さ約1mm、長さ約16cmの金属板を3つ折りにしたものである。機械類の部品と思われるが、機能、用途は不明である。

### (3) 表面採集陶磁器 (図29)

平成18年調査対象地域の畠地で表面採集した遺物である。

22～26は磁器製染付端反碗である。22は小型の端反碗で外面に源氏香文が施される。23は外面に松をあしらった文様が施され、内面口縁部直下には雷文が巡る。24～25は外面に花弁を描き、内面口縁部直下に鋸歯文が巡る。26は外面に草花文、内面口縁部直下に雷文が巡る。27は磁器製染付丸碗で、外面に草花文が、内面口縁部直下に菱形文が巡る。28は碗の底部で、外面に草花文が施される。29は磁器製染付筒形碗で、外面に花菱文、内面口縁部直下に雷文が巡る。器壁の厚みは体部から口縁端部まで一定で、このため口唇は他の碗類に比べ、倍近い厚みとなる。

30～34は磁器製染付碗蓋である。30は外面に遠山文、内面口縁部直上に菱形文が巡る。31は外面に草花文、内面口縁部直上に弧状文が巡る。32は外面に草花文、内面口縁部直上に鋸歯文が巡る。33は内面口縁部直上に渦巻文が巡る。34は外面に草花文が描かれる。

35は磁器製皿で、見込みに沙綾形文が押捺される。

36～37は磁器製染付段重である。36は外面に松文と思われる文様を施す。37は外面に草花文を施す。

38～43は陶器である。38は油注蓋で、上面に灰釉が施される。39は全面に銅緑釉が施される。平面観は多角形になりそうである。火入れであろうか。40は土瓶で、外面に銅緑釉が施される。内面は露胎。41は鉢の底部で、外面灰釉、内面鉄釉である。42はすり鉢で、内外面鉄釉が施される。御目の摩耗は確認できない。43は外外面ともに長石釉が施される浅い皿状の器形で、行灯皿の可能性がある。

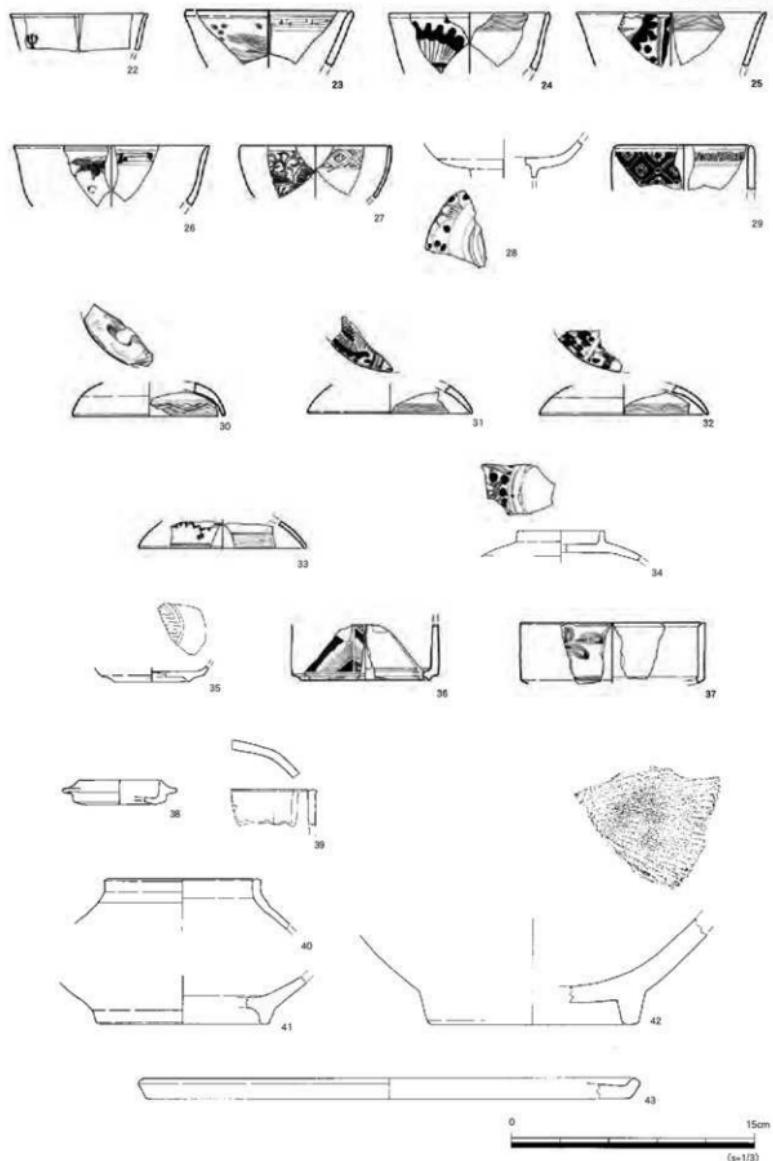


図29 表面採集遺物

表1 SD2 出土近代遺物（陶磁器）一覧

掲載番号	実測番号	種類	器種	口径(cm)	底径(cm)	器高(cm)	備考
1	31	磁器染付	碗蓋	11.0	4.2	3.1	外面雲形の弧状文、点、2とセット
2	32	磁器染付	碗	12.2	5.1	5.0	外面雲形の弧状文、点、1とセット
3	33	磁器染付	碗	11.0	4.1	5.0	外面シダ等の草文
4	36	磁器色絵	碗	11.1	4.2	5.2	外面菊花文、扇文
5	38	磁器色絵	碗	11.6	4.3	4.9	外面扇文
6	39	磁器染付	碗	11.6	3.9	5.7	外面松文、魚文、高台内呉須書き「白泉」
7	35	磁器染付	碗	11.0	4.0	5.0	
8	34	磁器染付	碗	11.4	4.0	5.0	
9	30	磁器染付	皿	14.2	7.8	4.0	内面、筆文、菊文、波文、繪垣文、梅花文、型紙摺
10	40	陶器	すり鉢	30.0			

表2 SD2 出土近代遺物（ビール瓶及びガラス製品）一覧

掲載番号	実測番号	器種	口径(cm)	底径(cm)	器高(cm)	銘柄	製造元	刻印等	製造期間
11	24	ビール瓶	2.2	7.0	28.5	大日本麦酒 株式会社	[TRADE MARK] [DAINIPPON BREWERY Co.LTD]	明治39(1906)～ 昭和24(1949)	
12	23	ビール瓶	-	7.5	-	大日本麦酒 株式会社	[TRADE MARK] [DAINIPPON BREWERY Co.D]	明治39(1906)～ 昭和24(1949)	
13	26	ビール瓶	-	7.3	-	大日本麦酒 株式会社	[DAINIPPON BREWERY Co.LTD]	明治39(1906)～ 昭和24(1949)	
14	22	ビール瓶	-	7.0	-	フジビール 東洋醸造株 式会社	[フジビール] [TRADE MARK], [TOKYO BREWERY CO.,LTD]	大正10(1921)～ 大正12(1923)	
15	27	ビール瓶	-	6.9	-	ユニオン ビール 日本麦酒販 泉株式会社	[NIPPON BEER KOSEN CO.,LTD]	大正10(1921)～ 昭和8(1933)	
16	29	ビール瓶	-	7.3	-	カスケード ビール 日英醸造株 式会社	[ANGLOJAPANESE BREWERY COMPANY,LTD.,TOKYO]	大正8(1919)～ 昭和3(1928)	
17	25	ガラス瓶	-	5.8	-	不明	OKAZAKI JAPAN ISHII&CO]	不明	
18	28	ランプ油壺	-	5.4	-	不明	大正二年製]	大正2(1913)？	

表3 包含層出土遺物（陶磁器）一覧

掲載番号	実測番号	グリッド	層位	種類	器種	口径(cm)	底径(cm)	器高(cm)	備考
19	41	N-7-D	I層(耕作土)	陶器	土瓶蓋	7.1			外面灰釉、内面露胎
20	42	B-6-b	I層(表土)	陶器	土瓶蓋	30.0			外面銅綠釉、内面露胎

表4 包含層出土遺物（金属製品）一覧

掲載番号	実測番号	グリッド	層位	種類	器種	全長(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	備考
21	43	B-6-b	I層(表土)	銅製品	不明	5.4	0.7	0.1	

表5 表面採集遺物一覧

掲載番号	実測番号	グリッド	種類	器種	口径(cm)	底径(cm)	器高(cm)	備考
22	4	K-10	磁器染付	端反碗	8.1			外面源氏香文
23	1	K-11	磁器染付	端反碗	10.0			外面松文、内面雷文
24	2	I-8	磁器染付	端反碗	9.6			外面花文、内面锯齿文
25	5	K-10	磁器染付	端反碗	11.2			外面花文、内面锯齿文
26	7	J-8	磁器染付	端反碗	11.5			外面草花文、内面雷文
27	8	I-12	磁器染付	丸碗	9.0			外面唐花草花文、内面菱形文
28	9	I-9	磁器染付	碗		3.9		外面草花文
29	3	J-9	磁器染付	筒型碗	8.5			外面花菱文、内面雷文
30	12	K-11	磁器染付	碗蓋	9.0			外面遠山文、内面菱形文
31	10	I-9	磁器染付	碗蓋	10.0			外面草花文、内面弧状文
32	11	K-10	磁器染付	碗蓋	10.1			外面草花文、内面雷文内面锯齿文
33	6	E-11	磁器染付	碗蓋	10.0			内面満巻文
34	13	K-11	磁器染付	碗蓋		5.1		外面草花文
35	14	I-6	磁器	皿		4.5		見込沙綾形文
36	15	J-10	磁器染付	段重		7.9		松文?
37	16	I-8	磁器染付	段重		10.2		外面草花文
38	19	K-10	陶器	油注蓋	5.0	1.5	5.5	上部灰釉
39	21	J-9	陶器	火入?				内外面銅緑釉
40	17	I-8	陶器	土瓶	9.2			外面銅緑釉
41	20	E-9	陶器	鉢		10.2		外面灰釉、内面鐵釉
42	37	K-10	陶器	すり鉢		12.3		内外面鐵釉
43	18	E-11	陶器	行灯皿?	29.8	29.5	1.3	内外面長石釉

表6 SD2 出土遺物集計

種別	碗	碗蓋	皿	瓶類	壺類	すり鉢	ピール瓶	飲料瓶	薬瓶	ランプ油壺	総計
ガラス製品							62	28	3	1	94
磁器	16	4	3	4							27
陶器				8	2	7					17
総計	16	4	3	12	2	7	62	28	3	1	138

表7 包含層出土遺物集計

種別	碗	碗蓋	皿	燈明皿	瓶類	土瓶蓋	壺類	不明	総計
近代遺物								2	2
金属製品								1	1
磁器・染付	9	3	8						20
陶器				1	3	2	2		8
総計	9	3	8	1	3	2	2	3	31

表8 表面採集遺物集計

種別	碗	碗蓋	皿	鉢	燈明皿	瓶類	土瓶	壺類	すり鉢	その他	不明	総計
純文土器										1		1
近代遺物										19		19
磁器・染付	61	17	55	3		4				6	9	155
陶器					6	9	9	4	4	4	6	42
総計	61	17	55	3	6	13	9	4	4	30	15	217



# V章 自然科学的分析

## 1 火山灰同定

アースサイエンス株式会社

加藤 孝幸

### はじめに

本報告は厚沢部町教育委員会御発注の表題の火山灰分析についての報告です。

分析に当たっては北海道教育大学札幌校、岡村聰教授の御指導、御援助を得ました。記して感謝申し上げます。

### (1) 火山灰試料の採取位置

館城跡で3試料の火山灰を採取した。これらの位置を断面図および写真に示す。各火山灰はそれぞれ以下のような層序的位置を占める。

#### ア 試料 No.1及び2

館城跡の南側を区画する堀及び土壘の断面確認調査。

試料No.1(土層7)については、試料No.2(土層9)より上層で、試料No.2採取土層との間には黒色土層(土層8)を挟む。

試料No.2については、明治元年(1868)構築と推測される土壘の構築面下にも確認できることから、堆積年代の上限は1868年である。

#### イ 試料 No.3

「散兵壕跡」1と称される遺構の断面確認調査。調査結果、人為的な構築物ではなく、風倒木痕であることを確認した。

試料No.3は、樹木の転倒により生じたと考えられる崖みに堆積したものである。調査者の断面観察により、試料No.2と同一火山灰の可能性が高いと考えられている。

### (2) 火山灰の分析方法

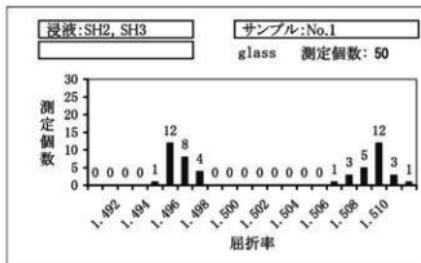
温度変化型屈折率測定法により、火山ガラスの屈折率を測定した。サンプルは、水洗後、約70°Cで乾燥させたのち、鏡下で確認しながらピックアップした。次に本試料を、中村ほか(2002)の方法にしたがい、400°Cで12時間加熱し脱水した。火山ガラスは1サンプルにつき約50粒程度を選別し測定した。

本測定は、横山ほか(1986)により実用化された標準ガラスを使用した屈折率測定法である。浸液法の一種で、温度変化に伴う浸液と対象物との相対的な屈折率差が鏡下で動的に観察できるので、火山ガラスや斑晶鉱物1個体ごとの測定が可能である。

### (3) 分析結果と考察

#### 3-1 試料 No.1

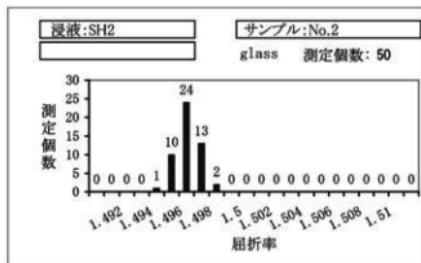
試料 No.1につき火山ガラス50粒の屈折率を400°C・12時間法を用いて行った結果のヒストグラムを以下に示す。



400°C・12時間法を用いて屈折率測定を行った結果は、屈折率の値がバイモーダルな幅の広い分布を示す。これは中村ほか(2002)のB-Tm(10世紀)のデータと非常に良く一致する結果である。すなわち、試料 No.1は B-Tm であると判断できる。但し、実体顕微鏡や偏光顕微鏡で観察すると、他の地点の B-Tm のように、ほぼ火山ガラスだけからなるわけではなく、本試料には岩片が多く確認される。鉱物片は斜長石、斜方輝石、不透明鉱物が認められる(偏光顕微鏡写真)。火山ガラスのタイプはバブル型(平板状・Y字状)と軽石型(繊維状・スポンジ状)が同程度含まれている。

#### 3-2 試料 No.2

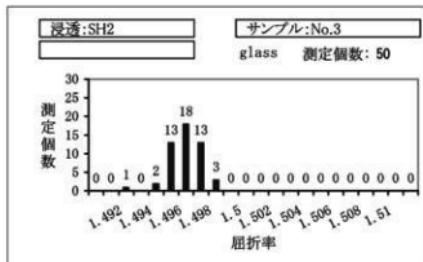
試料 No.2につき火山ガラス50粒の測定結果(400°C・12時間法)のヒストグラムを以下に示す。



屈折率のデータを中村ほか(2002)のデータと比較(400°C・12時間法)すると、最頻値は Ko-c2(1694)のものに最も近い。Ko-d(1640)の可能性も考えられる。実体鏡および偏光顕微鏡で観察すると、斜長石を非常に多く含み、有色鉱物として斜方輝石を多く含んでいる。単斜輝石や不透明鉱物を少量含む(偏光顕微鏡写真)。また、火山ガラスのタイプとして軽石型(繊維状・スポンジ状)が多く、バブル型ガラス片はほとんど認められない。

## 3-3 試料 No.3

試料 No.3につき火山ガラス50粒の測定結果（400°C・12時間法）のヒストグラムを以下に示す。



試料 No.2と同じく、屈折率データを中村ほか（2002）と比較すると、Ko-c2（1694）のデータに最も近い結果となり、顕微鏡観察においても No.2と同様に斜長石と斜方輝石を多く含んでおり、少量の單斜輝石や不透明鉱物を含む（偏光顕微鏡写真）ことがわかった。屈折率が酷似すること、および鉱物組み合わせが類似することから、試料 No.3は試料 No.2と同一テフラである可能性が高い。

## 引用文献

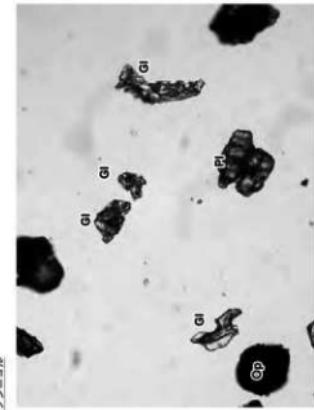
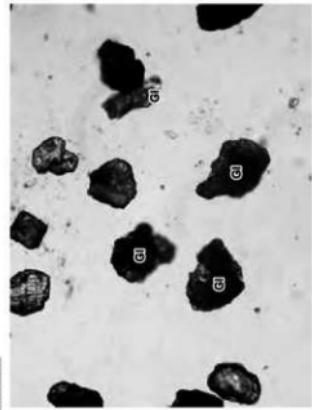
- 中村有吾・片山美紀・平川一臣（2002）水和の影響を除去した北海道の完新世テフラガラス屈折率、第四紀研究、41、11-22。  
 横山卓雄・塙原 徹・山下 透（1986）温度変化型屈折率装置による火山ガラスの屈折率測定・第四紀研究、25、21-30。

## 鏡下写真

試料番号: No. 1

岩石名等: 火山灰

オーブン二回



オーブン二回

Gr:火山ガラス (Pm:輝石タイプ)  
Pl:斜長石 Opx:斜方輝石 Cpx:单斜輝石  
Op:不透明鉱物

## 偏光顕微鏡写真

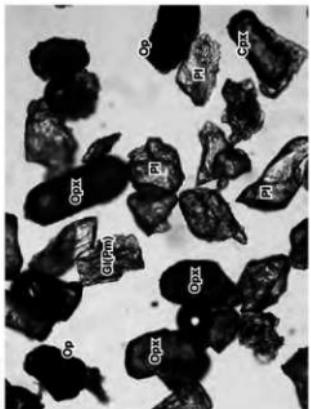
### 凡例

鏡下写真

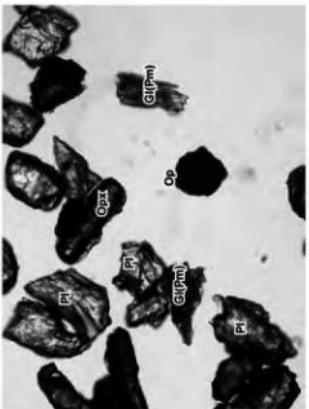
試料番号：No. 2

岩石名等：火山灰

オーブンニコル  
スケール 0.1mm



オーブンニコル  
スケール 0.1mm



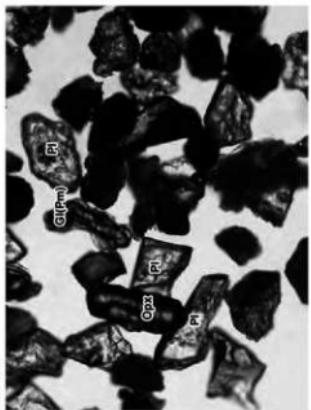
スケール 0.1mm

鏡下写真

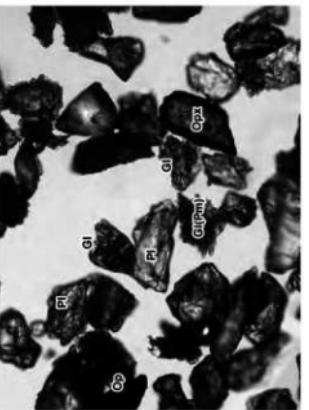
試料番号：No. 3

岩石名等：火山灰

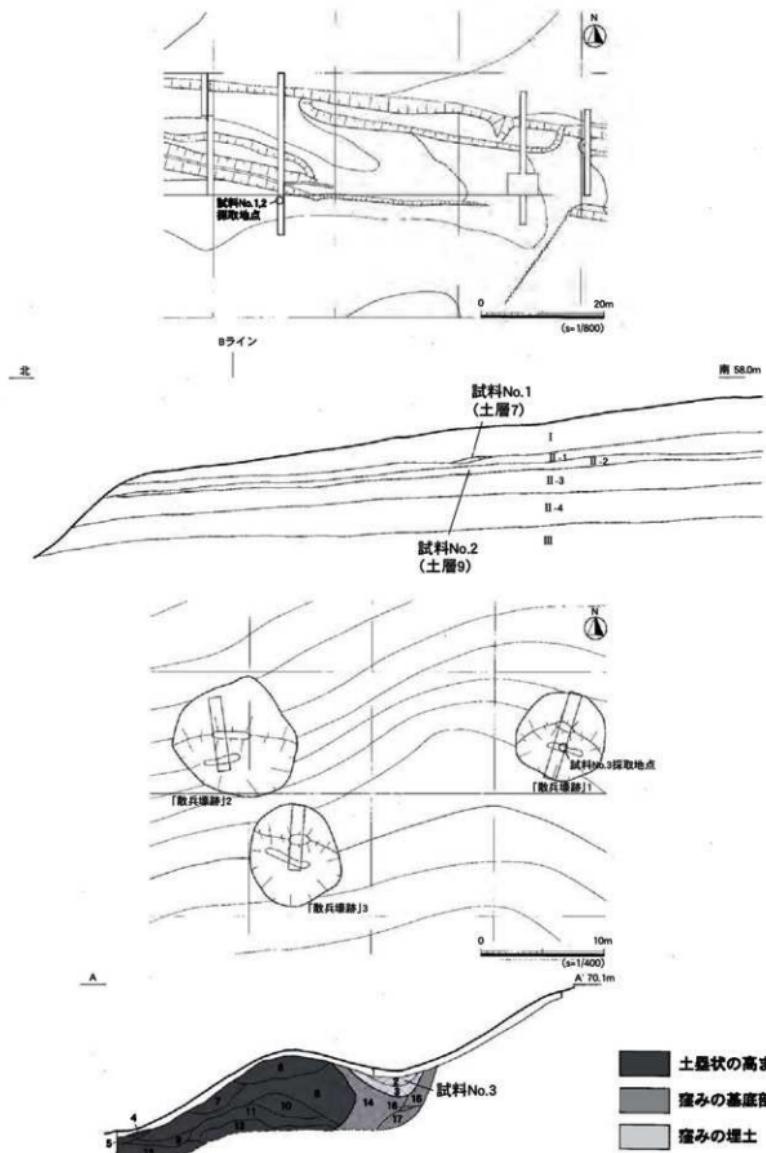
オーブンニコル  
スケール 0.1mm



オーブンニコル  
スケール 0.1mm



スケール 0.1mm



火山灰同定試料採取位置

# VI章 調査のまとめ

## 1. 調査成果のまとめ

### (1) 南辺の堀と土塁

2箇所に調査区を設定し、断面による土塁及び堀の構造確認を行った。

堀及び土塁の残存状況は良好で、その周辺の包含層の残存状況も同様に良好である。

また、2つの調査区では、その断面構造に違いがあることが明らかになった。館城南辺の堀は、6ラインを境に東西の土塁が約15m幅で食い違いをみせる。第1調査区で確認した6ライン以西の土塁では、構築当初から土塁基底部幅で平坦に盛土をし、同様の手順で盛土を順次上へ積み上げて構築した痕跡がうかがえる。これに対し、第2調査区で確認した6ライン以西の土塁では、第1調査区で確認されたような基底部から平坦な盛土を順次上へ積み上げられた堆積構造ではなく、幅や厚さに規則性を持たない堆積の単位によって構成される。また、堆積の方向が北から南であることから、土砂の供給源は土塁南側の低湿部の掘削土と推測できる。

土塁の東西における堆積構造の差をどのように解釈するかは、館城全体の構造を把握した上で課題となろうが、6ラインを挟んだ東西では、堀の幅にも差がみられることなども重要であろう。

### (2) 「散兵壕跡」

「散兵壕跡」と称されてきた遺構のうち3基を抽出して調査を実施した。

調査の結果、調査対象とした3基はいずれも人為的な構築物ではなく、風倒木痕であることを確認した。また、1694年降灰のKo-c2が僅みに堆積することから、降灰以前の形成であり、館城跡とは無関係であることは明らかである。

今回調査を実施した「散兵壕跡」は、おそらく100基を超えると予想される「散兵壕跡」のごく一部であるが、いずれも典型的なものを抽出しており、その他の「散兵壕跡」についてもこれらと同様、風倒木痕と推測する。

### (3) 西辺の堀・柵列

これまで未確認だった西辺の堀・柵列の一部を確認した。また、「正門」に関連すると思われる開口部を検出した。

西辺の堀は、ある程度自然に埋没した後、人為的に埋戻されていることが確認できた。次節にて詳述するが、埋戻しの年代は、大正10(1921)年から昭和10(1935)年頃と考えられる。堀の幅は約1m、深さは検出面から10~15cm、現況の地表面から約70cmである。堀の底面は平坦で壁はほぼ垂直に立ち上がるが、調査区西端で確認したように上位では逆「ハ」の字状に開く可能性もある。幅が狭く、深さもないことから、防衛的な機能は低いと推測する。防衛の実質的な機能は柵列が担い、区画、排水等の役割を負っていたのかもしれない。

開口部は、SD1の屈曲部、SD2南端、SD3で構成される。SD1~SD2間は約14mである。門を構成する柱穴等の遺構は確認できなかった。SD1屈曲部先端やSD3は、削平のため全体を検出し切れていない可能性もあるが、馬出し状の突出部を形成する可能性もある。

### (4) SD2上層から出土するビール瓶について

SD2上層から、陶器、ビール瓶、ガラス製品等の近代遺物が出土した。これらは近代に館城周辺の農地整備等の事情で堀の埋戻しが行われ、その際に一括廃棄されたものであろう。

出土したビール瓶のうち、「東洋醸造株式会社」製の「フジビール」はきわめて短期間の製造販売である

ことから、堀の埋戻し年代を推定する上で参考となる。

「東洋醸造株式会社」は、大正8年に宮城県仙台市に地元の資本家によって設立された。大正10年10月10日から「フジビール」を発売したが、まもなく経営難となり、大正12年に「麒麟麦酒株式会社」に吸収合併された。合併後は「麒麟麦酒株式会社」の仙台工場として稼働している（麒麟麦酒株式会社1957）。「フジビール」の銘柄は、合併後は消滅した。

以上のように、「フジビール」は、大正10(1921)～大正12(1923)年の製造販売であることから、これらの一括遺物の上限年代は、大正10(1921)年である。下限年代を直接示す資料は出土していないが、「フジビール」の製造終了が大正12(1923)年であることから、この年代を大きく降ることはないものと推測する。ビール瓶の回収再利用を考慮に入れても、製造販売から10年以内には廃棄された可能性が高い。一括遺物の中には、大正10(1921)～昭和8(1933)製造販売の「ユニオンビール」（日本麦酒鶴泉株式会社）、大正8(1919)～昭和3(1928)製造販売の「カスケードビール」（日英醸造株式会社）などもあることから、年代の下限は昭和10年を降ることはないと想定される。「大正二年製」の浮彫りのあるランプ油壺や「大日本麦酒」製のビール瓶の年代とも矛盾しない。

以上のことから、SD2の埋戻し年代について推測すると、大正10(1921)年から昭和10(1935)年頃の年代が考えられる。

#### （5）北辺の堀・柵列について

今回の調査では、館城北側を区画する堀・柵列等の遺構は確認できなかった。現時点で断定はできないが、L-5グリッド付近から指定地内北辺を北北西へ流れる流路などが区画や防衛の役割を果たしていた可能性を考える必要がある。

## 2. 今後の課題

西辺の堀が指定地外へ延びることが明らかになったことにより、史跡の保存管理上、この延長の確認が急務となった。また、南辺土塁の西側延長もこれまで調査が実施されたことがなく、この地域の堀・柵列の所在の有無を確認する必要がある。北辺の堀については、自然の流路が区画や防衛の役割を果たしていた可能性があることから、ある程度広範囲の掘開を行い、所在の有無を確認する必要がある。

# 参考文献

## <引用文献>

### I 章

二木小児郎 1937『二木小児郎自叙伝 福寿草』(厚沢部町教育研究会社会科サークル 2003『二木小児郎自叙伝 福寿草 復刻版』)

厚沢部町史編纂委員会 1969『櫻島－厚沢部町の歩み－』

大場利夫 1969「北海道檜山郡厚沢部城址」『日本考古学年報17(昭和39年度)』日本考古学協会編

### II 章

工業技術院地質調査所 1975『地域地質研究報告 館地域の地質』

北海道開発庁 1970『5万分の1 地質図幅説明書 江差』

松前町史編集室 1974『松前町史 史料編 第二巻』

永田富智 1991「北門史綱(前承－卷之四より卷之七)」『松前藩と松前－松前町史研究紀要－』松前町史編集室

江差町史編集室 1981『江差町史』第四巻史料四(関川家文書) 江差町

江差町史編集室 1983『江差町史』第六巻通説二 江差町

江差町史編集室 1979『江差町史』第三巻史料三 江差町

菊池明 1998『南柯紀行・北国戦争概略衝銘隊之記』新人物往来社

須藤隆仙 1996『箱館戦争資料集』新人物往来社

### III 章

厚沢部町教育委員会、十勝考古学研究所 1989『館城趾 遺構確認調査報告書』

### V 章

\*章末に記載

### VI 章

麒麟麦酒株式会社 1957『麒麟麦酒株式会社五十年史』

## <その他の参考文献>

厚沢部町教育委員会 1991『館城址 遺構・範囲確認調査－第2・3次調査報告書－』

大橋康二 1993『肥前陶磁』考古学ライブラリー55 ニュー・サイエンス社

大橋康二 1994『古伊万里の文様』理工学社

大橋康二 2004『世界をリードした磁器窯 肥前窯』シリーズ「遺跡を学ぶ」005 新泉社

九州近世陶磁学会 2000『九州陶磁の編年－九州近世陶磁学会10周年記念誌－』

財團法人 潤戸市埋蔵文化財センター 2002『財團法人 潤戸市埋蔵文化財センター企画展図録 江戸時代の瀬戸窯』

財團法人 潤戸市埋蔵文化財センター 2004『財團法人 潤戸市埋蔵文化財センター企画展図録 江戸時代の瀬戸・美濃窯』

函館市教育委員会 2006『特別史跡五稜郭跡 函館奉行所跡発掘調査報告書－平成17年度復元整備事業に伴う発掘調査報告書－』

松前町教育委員会 2005『東山遺跡 代行事業町道朝日豊岡線改良工事に關わる埋蔵文化財発掘調査報告』



## 写 真 図 版





写真 1 第 1 調査区土壌断面（南西から）

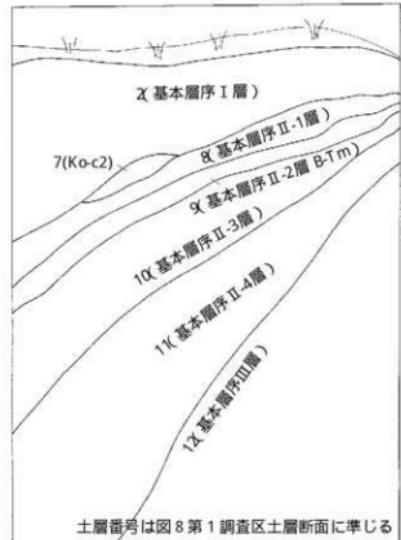


写真 2 第 1 調査区南側土層断面（北西から）



写真 3 第 2 調査区土壠断面（北西から）



写真 4 第 2 調査区土壠南側底部及び低湿部断面（南西から）



写真 5 「散兵壕跡」3 調査前状況（東から）



写真 6 「散兵壕跡」3 断面（南西から）



写真7 「散兵壕跡」3窪み部分断面（南西から）



写真8 第5調査区流路跡検出（東から）



写真9 SD2、SA2 屈曲部検出（南東から）



写真10 開口部検出（南から）



写真11 SD1 屈曲部 B-B' 断面（西から）



写真12 SD2(I-12) 上面検出（北から）



写真13 SD2(I-12) 調査風景（南から）



写真14 SD2(I-12) 上層完掘（南から）

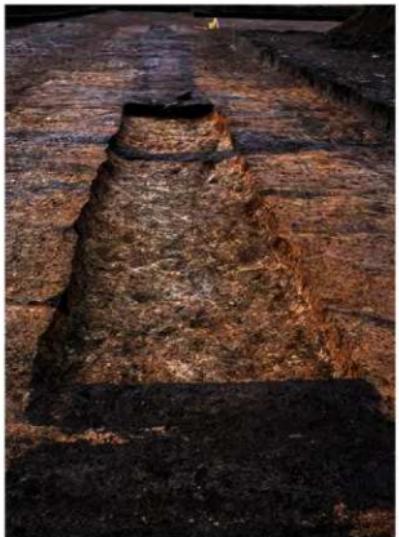


写真15 SD2(I-12) 上層完掘（北から）



写真16 SA2 南端完掘（北西から）



写真17 SD2(J-12-a) 検出（南東から）

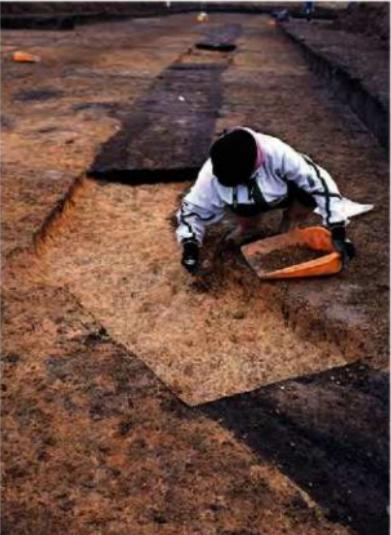


写真18 SD2(J-12-a) 完掘（北から）



写真19 SD2(J-12-a) A-A' 断面（南東から）



写真20 SA2(I-12-b) A-A' 断面（西から）



写真21 SD2 調査区西端断面（西から）



写真22 SD3 検出（西から）



写真23 SD3 半裁（西から）

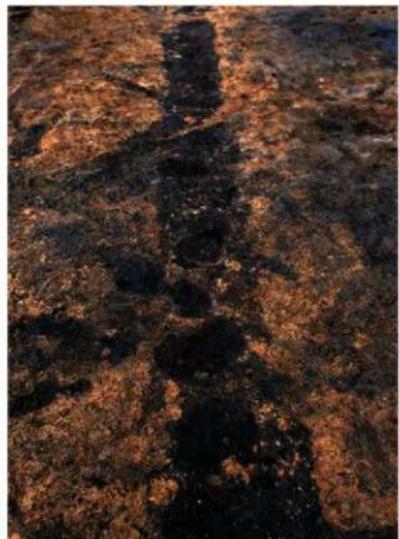
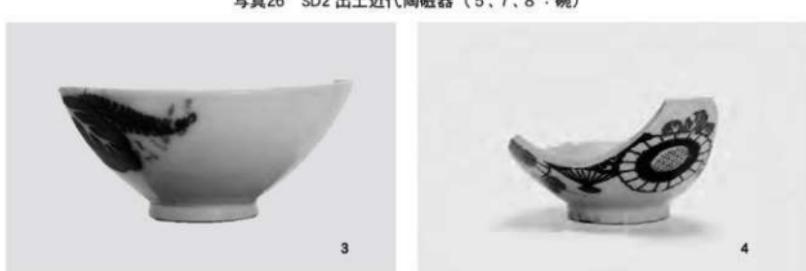
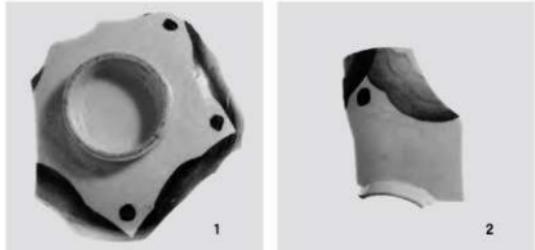
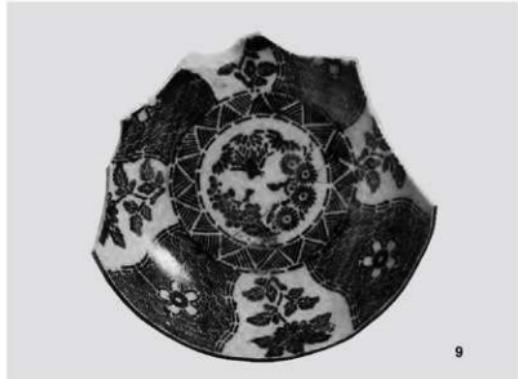


写真24 SA2(J-12-c) 柱痕検出（南東から）





9



9

写真31 SD2 出土近代陶磁器（皿）



14

写真32 「フジビール」



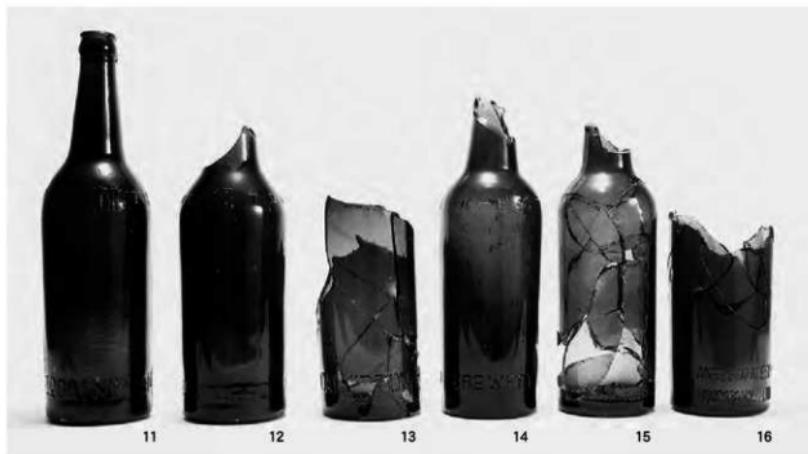
15

写真33 「日本麦酒鉱泉」



16

写真34 「日英醸造」



11

12

13

14

15

16

写真35 SD2 出土ビール瓶（11～13：「大日本麦酒」、14：「フジビール」、15：「日本麦酒鉱泉」、16：「日英醸造」）



写真36 SD2 出土ガラス製品（17：ガラス瓶、18：ランプ油壺）



写真37 油壺底面（「大正二年製」浮彫り）

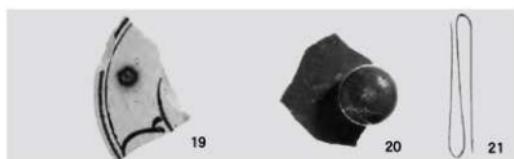


写真38 包含層出土陶磁器（19、20：土瓶蓋、21：銅製品）

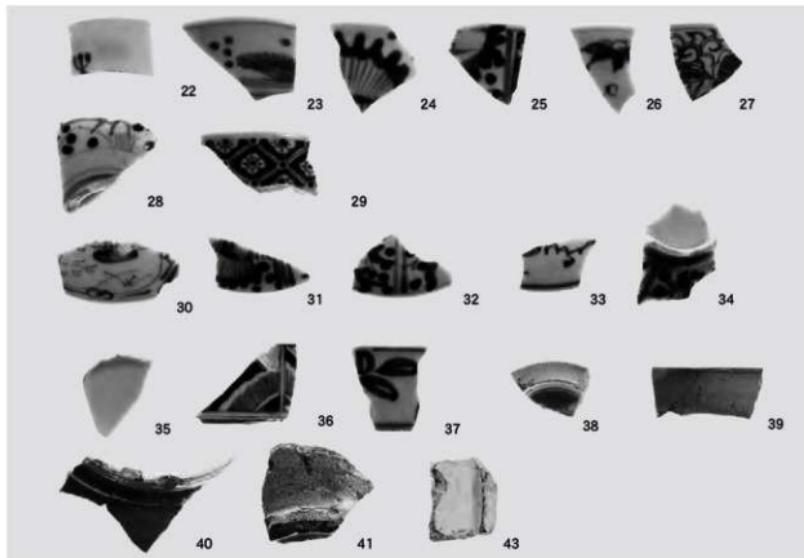


写真39 表面採集陶磁器（22～29：碗、30～34：皿、36、37：段重、38：油注蓋、39：火入れ？、40：土瓶、41：鉢、43：行灯皿？）



## 報 告 書 抄 錄

ふりがな	しせきまつまえしろあと ふくやまじょうあと たてじょうあと たてじょうあと							
書名	史跡松前氏城跡 福山城跡 館城跡 館城跡Ⅲ							
副書名	平成17・18年度町内遺跡発掘調査事業に伴う発掘調査報告書							
シリーズ名	厚沢部町教育委員会発掘調査報告書							
シリーズ番号	第5集							
編著者名	石井淳平							
編集機関	厚沢部町教育委員会							
所在地	〒043-1113 北海道檜山郡厚沢部町新町234-1							
発行年月日	2007年3月31日							
ふりがな 所収遺跡	ふりがな 所在地	コード		北緯	東経	調査機関	調査面積	調査原因
たてじょうあと 館城跡	北海道檜山 郡厚沢部町 字城丘158 ほか	1363	C-03-14	41° 52'36"	140° 20'46"	厚沢部町 教育委員会	2184.18m <sup>2</sup>	埋蔵文化 財緊急調 査事業
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項			
館城跡	城跡	幕末	堀、土塁、柵列	陶磁器、金属製品	現存する土塁の構造 確認 西辺の堀の確認 「散兵壕跡」と称さ れる遺構が、風倒木 痕であることを確認 した。			

厚沢部町教育委員会発掘調査報告書第5集  
史跡松前氏城跡 福山城跡 館城跡 館城跡Ⅲ  
平成17・18年度町内遺跡発掘調査事業に伴う発掘調査報告書

平成19(2007)年3月31日

編集・発行 厚沢部町教育委員会

〒043-1113 北海道檜山郡厚沢部町新町234番地の1

T E L (0139) 64-3311

F A X (0139) 64-3822

印 刷 (有)三和印刷

〒040-0061 北海道函館市海岸町8番11号

T E L (0138) 45-0845

F A X (0138) 43-3594